

2018 1

JAPAN
APIC

No.006

Since 1975



01 ごあいさつ

【特集】 広まる大学との連携 — 津田塾大学 —

特別インタビュー

03 津田塾大学 高橋裕子 学長

07 津田塾大学からインターン受け入れ開始

太平洋事業

09 太平洋・リーダー招聘計画 (ミクロネシア連邦)
ピーターソン州知事・モセス副議長 招聘

11 上智大学大学院地球環境学研究所との共催
上智大学にてシンポジウム開催

12 APIC-麗澤大学学生交流企画
ミクロネシア短期大学からの学生招待計画

13 上智大学ミクロネシア・エキスポージャーツアー

15 津田塾大学ミクロネシア写真展「南洋の光」

17 太平洋・リーダー招聘計画
サモア通信・情報技術大臣 招聘

19 COM-FSM 学生招待計画
麗澤大学及び上智短期大への短期留学

カリブ事業

21 西インド諸島大学ケイブヒル校学長 招聘

インタビュー

23 西インド諸島大学卒業生
シェキーラ・トンプソンさん

25 西インド諸島大学セント・オーガスティン校学長 招聘

27 カリブ・リーダー招聘計画
ジャマイカ教育・青年・情報大臣 招聘

29 バルバドスヘアニメ専門家派遣

30 カリブ環境セミナー 2017

太平洋・カリブ事業

31 太平洋・カリブ記者招聘計画 2017

若い世代の育成

33 MCT との協力により大学院生受け入れ開始

34 上智大学生 APIC インターンシップを体験

39 APIC 学生会発足

ザビエル留学生奨学金

35 太平洋・リーダー招聘計画
ミクロネシア連邦ウルセマル連邦議員 (元大統領) 招聘

37 第4期ザビエル留学生 新入生2名入学
ザビエル留学生 オクトーバーフェストに参加
佐原大祭にザビエル留学生が参加

APIC 役員に聞く

インタビュー

41 成蹊大学 名誉教授
廣野 良吉 APIC 評議員

ナンマトル遺跡保存計画

45 シリーズ第2回

ミクロネシアの巨石文化

—世界文化遺産ナンマトル遺跡を中心に—
上智大学客員教授 片岡修氏

49 APIC 早朝国際情勢講演会

50 APIC 役員名簿／ご寄附のお願い

今号の表紙写真



ミクロネシア連邦チューク環礁
撮影者：フロイド・K・タケウチ

Photo Courtesy Floyd K. Takeuchi / Waka Photos

昨年11月下旬、財団の「有識者招聘計画」によりウルセマル・ミクロネシア連邦議会議員 (元大統領) が来日しました。ザビエル高校生留学制度への寄付者に対する謝意表明のための訪日でもありました。上智大学・APICの二者の協力によるこの制度は発足して四年になりますが、多くの方々による寄付金によって支えられています。ウルセマル連邦議員の発議により、多額のご寄付をされた坂本光彦・雪ヶ谷化学工業株式会社顧問に対しミクロネシア連邦議会が感謝決議をしました。11月29日、同連邦議員より坂本氏に対し感謝決議文が伝達されましたが、その際同議員は、日本のすべての寄付者に対し感謝すると心をこめて述べ、この基金は同連邦の国づくりのための人材育成に欠かせないものであるとの所信を披歴され、同席していた留学生を激励したのであります。

私共も制度の充実、発展を期して参ります。

明けましておめでとうございます。
本年も宜しくお願い申し上げます。



一般財団法人 国際協力推進協会
理事長

佐藤 嘉恭

いよいよ

2017年6月～12月のAPICの主な動き

- 6月10日 西インド諸島大学ケイブヒル校学長招聘計画 (～6月18日)
- 6月15日 第337回早朝国際情勢講演会 (外務省南部アジア部長 梨田和也氏)
- 7月3日 津田塾大学より2名のインターン生を受け入れ (～7月31日)
- 7月9日 カリブリーダー (ジャマイカ教育大臣) 招聘計画 (～7月15日)
- 7月20日 第338回早朝国際情勢講演会 (前外務審議官 (経済) 片上慶一氏)
- 同日 上智大学大学院地球環境学研究科主催シンポジウム開催
- 8月1日 上智大学より3名のインターン生を受け入れ (～9月15日)
- 8月6日 太平洋リーダー (ピーターソン州知事・モーセス議会議長) 招聘計画 (～8/13)
- 9月2日 バルバドスヘアニメ専門家派遣計画 (～9月3日)
- 9月8日 APIC-麗澤大学学生交流企画 ミクロネシア短期大学からの学生招待計画 (～2018年2月10日)
- 9月10日 上智大学ミクロネシア・エキスポージャーツアー (～9月17日)
- 9月18日 バルバドスにて環境セミナー (～9月19日)
- 9月21日 第339回早朝国際情勢講演会 (前駐インドネシア共和国特命全権大使 谷崎泰明氏)
- 同日 ザビエル留学生第4期生のショーンさんとリアナさんが上智大学に入学
- 同日 APIC-MCT 上智大学大学院地球環境学研究科留学生としてバーサさんとブラッドフォードさんが入学
- 9月22日 西インド諸島大学セント・オーガスティン校学長招聘計画 (～9月30日)
- 10月16日 APIC-FPCJ 太平洋・カリブ記者招聘計画 2017 (～10月25日)
- 同日 津田塾大学にてミクロネシア写真展「南洋の光」 (～11月7日)
- 10月19日 第340回早朝国際情勢講演会 (外務省アジア大洋州局審議官 石川浩司氏)
- 10月30日 ミクロネシア短期大学から麗澤大学 & 上智短大への短期留学 (～11月16日)
- 11月5日 サモア通信・情報大臣招聘計画 (～11月12日)
- 11月16日 第341回早朝国際情勢講演会 (外務省欧州局長 正木靖氏)
- 11月27日 ウルセマル ミクロネシア連邦議員招聘計画 (～12月1日)
- 12月14日 JICA 地球ひろばにてミクロネシア写真展「南洋の光」 (～2018年1月11日)
- 12月21日 第342回早朝国際情勢講演会 (外務省北米局長 森健良氏)





【APIC 主催食事で受付作業をするインターン生たち】



【左から：太刀川ゆりあ、津田塾大学高橋裕子学長、川上琳】

APICでのインターンシップは、「国際協力」の生の現場に触れることができる機会が多くあると思います。来日されるお客様の国際的な活動を側面からサポートするインターンシップですから、社会人になっていくうえで必要な基本的なスキルや、日本語・英語両方のコミュニケーション力を養ってほしいと思います。また、太平洋やカリブといった島嶼国に焦点を当てたユニークなプログラムは、今まで本学にはありませんでしたので、シンポジウムや写真展などの貴重な機会を多くの学生に活用してもらいたいと思います。



【4月に行われたMoU署名式にて。右：APIC 佐藤嘉恭理事長】

私たちの大学の源流は、「果敢に海を渡って留学した女性（津田梅子）が創設した私塾」です。海を渡ることがとても困難であった時代に、最初に留学生として米国で学んだ女性が作った大学なのです。その遺伝子を、学生の皆さんに

自分の利益だけではなくて、広く大きく社会の公益を考えられるような、広い視野を持った人、他者に深い思いを持つことができる人が、いわゆるグローバル人材と言われる人だと思います。

Q3・連携協定を結んだ際に、「人類の平和・安心・幸福の実現に寄与できるグローバル人材として大きく成長してほしい」という学長のコメントを拝見したのですが、学長が思い描く「グローバル人材」とはどのようなものですか。

は受け継いでいただきたいと願っています。グローバル人材になるには、必ずしも、グローバル化を謳う大企業で働くとか、国際機関で働くとかということだけではなくて、やはり世界に視野を開くことができる人になるということがまずは第一歩です。そして、積極的に世界の人類のための安心や平和や幸福を考えるときに、自分自身の持っている能力のどの部分を活かして活動したら、どのような貢献ができるのかということを考えてもらいたいと思います。

Q4・昨年のアメリカ大統領選挙で話題となったヒラリー・クリントンさんと同じウェルズリー大学で研究されていましたが、アメリカの大学を選ばれた理由は何か。また、留学しようと思われたきっかけは何ですか。

ウェルズリー大学を選んだ理由は、女子大学として21世紀においても躍進している大学であるからです。ボストンに近いウェルズリーは7シスターズという7つ（現在は5つ）の名門女子大学にアクセスしやすい拠点になることも魅力でした。

なぜアメリカの大学を選んだかというと、私の専門分野がアメリカ研究であるからです。津田塾大学は全国の大学の中でも、アメリカ研究のカリキュラムを導入した最初の大学の1つな

Interview

津田塾大学

高橋裕子 学長

津田塾大学とAPICは、2017年4月に教育連携に係る包括的な協定（MOU）を締結し、協力関係を強めています。今回は津田塾大学 高橋裕子学長に、これから津田塾大学が目指すもの、さらに、APICとの関係についてインタビューしました。（聞き手：APICインターン生 太刀川川上（津田塾大学））

Q1・津田塾大学は4月にAPICと連携協定を結びましたが、結ぶきっかけは何でしたか。また、この協力体制をどのようにお考えですか。

学校法人津田塾大学の理事会の方たちがAPICの理事の方たちと親交があり、連携協定を結んでどうかと、引き合わせて下さったのがきっかけです。

じつは協定がないときから、APICでインターンを経験させていただいた学生もいました。普通の大学生だったらとても行けないようなところ、そしてなかなかお会いできないような方たちとの食事会などに同行させていただいて、同じテーブルに学生がつかせてもらえたのですよね。このような学外での学修経験を積ませていただける協力体制を大変ありがたく思っ

略歴

1980年（昭和55年）津田塾大学英文学科卒業。84年に筑波大学大学院修士課程修了。89年に米・カンザス大学大学院博士課程修了。教育学博士。04年津田塾大学教授、16年より学長。専門は、アメリカ社会史（家族・女性・教育）、ジェンダー論。著書に『津田梅子の社会史』（玉川大学出版部）等。アメリカ学会副会長、日本学術会議連携会員。

ています。

本学には既にバリトール学長^{※1}に講演に来ていただいております。また10月にはフロイド・タケウチ氏の写真展等^{※2}を開催できたことをありがたく思っています。

Q2・協定により、APICのインターンシップやシンポジウムに津田塾生が参加できる機会が増えたと思うのですが、参加する学生にどのような期待をお持ちですか。

※1 西インド諸島大学ケイプヒル校（バルパドス）学長（本誌21ページ参照）。

※2 津田塾大学でのミクロネシア写真展「南洋の光」（本誌15ページ参照）。

んですね。創設者がアメリカの大学で学んでいたということも関係しますが、アメリカ研究を始めた先生が津田塾大学の理事長でいらしたこともあって、津田塾大学は早くから非常に優れたアメリカ研究プログラムを持っていました。私が英文学部のアメリカ研究コースの学生だった頃も、顕著な活躍をされたアメリカ研究者がいらつしやいました。私はアメリカ研究をさらに深めていきたいと思ったのでアメリカに留学しました。

Q5・近頃、留学をする学生が減少しているようですが、この現象をどのように思われますか。また、留学のメリットをお聞かせください。

減少しているのには、様々な原因があると思いますが、留学する学生は増えて欲しいと思っています。留学にはたくさんさんのメリットがあるからです。

私自身も留学しましたが、留学をすると日常生活で多様な文化に触れることができます。これはこのようにしなければならぬと思っています。ですが、違うやり方でやる人がいるということを目の当たりにします。そして、違う風にも別に差しさわりのないことがわかったり、目を見開かされる思いをしたりするのです。そのような経験は自分を大きく成長させるきっかけになると思います。

育成に女性たちの魂がこめられています。津田塾大学は、女性を育てる底力のある大学だと信じています。

NHK初の女性人事局長や、国連で大きな活躍をする方など、新しい扉を切り開いてきた素晴らしい卒業生が今もたくさんいます。このような方たちに続くような人々をこれからも出していきたいです。また、卒業後も卒業生のネットワークの中でサポートし合い、卒業生が先ほど申し上げたような「人類の平和、安心、幸福の実現に寄与できる人」に成長できる、そんな学校であり続けるのが私の夢です。

Q7・今年度から女子大学初の総合政策学部が設置され、4ターム制となりました。津田塾大学のこのような新たな動きをどのようにお考えですか。また、この体制になって期待することは何ですか。

総合政策学部は「課題解決能力」をキーワードにしています。これからの時代、人工知能（AI）やさらなるグローバル化の影響を受けて、社会が大きく変化するでしょう。少子化や人口減少が津波のように迫ってきていて、今ある職業がAIに取って代わられるようになるかもしれない。そういう中で皆さんたちは21世紀の後半までキャリアを切り開いていかなければならない世代です。これからの激しい変化に対応するために、21世紀後半までキャリアを展開して、

津田塾大学の4年間というのは私自身の基盤を作った時期だと思っていますが、併せて、カンザスで過ごした最初の留学期間は、自分自身のバックボーンになっていると思っています。2003年から04年にはカリフォルニアのスタンフォードに行きましたし、2013年から14年は東海岸のウエルズリーにいました。アメリカの中西部と西海岸、東海岸と様々な地域で生活を体験したということが、アメリカ研究者としての自分を育ててくれたと考えています。

また、留学は若い時には是非チャレンジしてもらいたいと思います。若い時は感性が柔らかく、違うものを受け入れやすく、いろいろなものに反応しやすい柔軟な時だからです。そのような経験を通して自分のバックボーンを作るといことがとても重要だと思います。

また、日本にいと親御さんに守られた環境で暮らしていますよね。しかし、留学すると様々なことを自分自身で解決していかなくてはならない。そのような生き抜く力というのも留学経験は培ってくれると思います。できれば1学期よりは1年、1年よりは学位を取るプログラムに参加してもらいたいですね。

Q6・ご自身も津田塾大学のご出身で、今は津田塾大学の学長をされていますが、津田塾大学とはどのような大学とお考えですか。また、津田塾大学学長としてのこれからの夢をお聞かせください。

生き抜いていくための古びない力、学び方、リベラルアーツを基盤として基本となる力を学んでほしいです。また、ギャップチームを活用して、学外での多様な学びのあり方を体験してきてほしいです。

Q8・トランスジェンダーの学生の受け入れを検討予定であるという記事を拝見したのですが、日本のジェンダー問題の現状についてどのようにお考えですか。また、女子大学としてどのような方針をお持ちですか。

トランスジェンダーの学生については、受け入れを検討する会議を開始したという段階です。まだ検討中なのでどういう方向になるかというところは申し上げることはできません。いわゆる「性同一性障害」の児童、生徒、学生が人権の問題としてフェアに対応されるべきであると考えています。

日本のジェンダーの状況については、女性の社会参画が非常に立ち遅れていたりと、意思決定に参加するところに女性が十分に配置されていなかったりという、様々な問題があります。だからこそ、津田塾大学は女性が自信と実力を身に付けて社会を変革できるような教育を提供できる高等教育機関でありたいと思っています。

Q9・ホームページに掲載されているTSUDA

津田塾大学の創設者、津田梅子は6歳でアメリカに渡り、1900年に津田塾大学の前身、女子英学塾を創設しました。女性がつくったという稀有さと、117年も続いていること、またこれまで11人の学長のうち10人が女性であったということに女性の力への信頼が感じられ、とても誇りに思っています。

次世代の女性を育成してきた「女の長い列」というものがあります。そのための「バトン」が次々とバトンタッチされてきていて、その中で私たちは育まれてきた。いまでも生まれ、そしてこれからも育んでいくということだと思っています。そういう意味でこの大学は女性の次世代の

VISION 2030を拝見しましたが、策定にあたり一番重視したことは何ですか。

やはり学生が中心であるということ、学生が実力をつけられるということ、そして、変革を担える女性を養成するということがモットーです。よりよい社会を作っていくために、女子大学で学ぶ女性たちにどのように力をつけ、一人ひとりの「伸びしろ」をいかに引き出すかを重視しました。もちろん21世紀には物事が早いです。リードでいるいろいろ大きく変わることが予測されていますので、それに対応できるような教育を提供し、時代の変化に対応できるような人を育てていくことを大切にしました。



【津田塾大学小平キャンパス】



【インタビュー中の様子】



6月

津田塾大学から

インターン受け入れ開始

2017年4月に津田塾大学との間で結ばれた教育連携協定(MOU)に基づき、津田塾大学の学生を対象とした短期インターンシップ・プログラムが開始されました。

津田塾大学は2017年度から4ターム制(クォーター制)を導入し、6月中旬から8月までの約2ヶ月半をギャップタームとしました。この期間には必修科目を置かず、長期インターンシップ、海外サマープログラム、ボランティア活動などへの参加を可能にしました。同大学では、このギャップタームを利用した学外学修を奨励しており、その一環としてAPICでのインターンシップ・プログラムがスタートしました。

今回参加したのは、同大学学芸学部国際関係学科1年の川上琳さんと、総合政策学部総合政策学科1年の太刀川ゆりあさんの2名。2017年7月の1ヶ月間、電話対応や文書作成などの一般的な業務はもちろんのこと、外務省幹部などを講師に招いて行う講演会の運営や有識者へのインタビュー及び記事執筆など、様々な業務を体験しました。APICでのインターンシップは、太平洋

島嶼国やカリブ諸国など、普段学生が関わる機会の少ない地域への支援事業を体験することで、大学の講義では知ることのできない国際協力の実際を学ぶ機会を提供しています。



インターンスケジュール

7月 3日	インターンシップ開始
7月 11日	津田塾大学 高橋裕子学長インタビュー
7月 20日	第338回早朝国際情勢講演会「G7/G20サミット」に出席
同日	APIC 廣野良吉 評議員 インタビュー
7月 31日	インターンシップ修了

インターン生たちが携わった主なプロジェクトは次のとおりです。

津田塾大学高橋学長インタビュー

津田塾大学とAPICの関係について、学長ご自身の経験、またこれから津田塾大学が目指すものなど、幅広い分野にわたってお話を聞くことができました。(本誌3ページ参照)

APIC 廣野評議員インタビュー

国際協力分野において経験を積んでこられたAPIC 廣野良吉評議員にインタビューを行いました。インターン生はインタビューを通して、現在の国際社会が抱える問題や、それに対して私達はどう向き合っていくべきかなどといった課題について理解を深めました。(本誌41ページ参照)

早朝国際情勢講演会

前外務審議官の片上慶一氏による「G7/G20サミット」という題目の早朝講演会に参加しました。インターン生2名は、受付業務のサポートに加え、講演会聴講後に「インターン学生の声」というレポートを作成しました。



津田塾大学
学芸学部国際関係学科1年
川上 琳さん

インターンを終えて

廣野先生へのインタビューを経験してたくさんのごことを学ぶことができました。インタビューする人について十分調べ、相手が答えやすいような質問を考えるなどの下準備を前々からしておくことや、アポイントメントの取り方など、普段大学では学ぶことのできない実践的な業務を多く学び、インタビュー未経験の私にとって貴重な体験となりました。

APICのインターン全体を通して、いくつか講演会に参加させていただいたり、オフィス内でのビジネスマナーや敬語を学んだり、ためになる話を聞かせていただくなど貴重な経験をたくさんさせていただきました。そのような経験を通して、自分の中で少し変化が生まれた気がします。例えば、留学したいという曖昧な願望が強い決意に変わり、普段読まなかった新聞をすすんで読むようになりました。一ヶ月という短い間にもかかわらず、これほど多くの刺激を自分に与えてくださったAPICにはとても感謝しています。また、APICでインターンをする機会をくださった津田塾大学関係者の皆様、ありがとうございました。今回のインターンを機にさらに自分自身を成長させていきたいと思えます。



津田塾大学
総合政策学部総合政策学科1年
太刀川 ゆりあさん

インターンを終えて

国際社会に興味があるという漠然とした思いから応募した初めてのインターンシップでしたが、想像を遥かに超える実り多く充実した1ヶ月を過ごすことができました。

インターン業務の一つ「ニュースレターの作成」では、カリブ海・太平洋地域の英語の記事を翻訳し所感をまとめました。国政にまつわることから、ローカルな話題まで、幅広い分野のニュースを毎日読むことができたため、現在世界で起きていることに目を向け、関心を抱きかけとなりました。数多くの講演会に参加した経験も非常に良い刺激になりました。APIC主催早朝講演会のように、国際協力の現場に携わっている方のお話を直接お聞きしたことは貴重な経験となり、国際社会にまつわる知識を深めることができました。

この一ヶ月間は責任感を持って仕事に取り組みたいことを実感しながら、多くの学びを得られたインターンシップとなりました。インターンシップを快く受け入れてくださったAPICの皆様には感謝の気持ちが尽きません。APICで学んだことを糧とし、自分自身の進路に対する考えを深められる様、今後も勉学に励んで参ります。



【枕崎鯉節工場を視察】

滞在中のスケジュール

8/6 (日)	来日
8/7 (月)	山際衆議院議員 表敬訪問 上智大学サリ副学長 表敬訪問 川崎市浮島処理センター 視察、APIC 主催夕食会
8/8 (火)	東京文化財研究所 訪問 小田原外務大臣政務官 表敬訪問 羽田空港発、鹿児島空港着
8/9 (水)	枕崎鯉節工場、西村浅盛商店 視察
8/10 (木)	鹿児島空港発、伊丹空港着 国立民族学博物館 視察
8/11 (金)	奈良文化財研究所 訪問、平城宮跡資料館 見学 平城宮跡内大極殿 見学、京都市内 視察
8/12 (土)	京都市内 視察
8/13 (日)	離日

◆地方視察（鹿児島県・奈良県・大阪府）
日程の後半は地方視察として、鹿児島県枕崎市や大阪・奈良を訪れました。鹿児島県枕崎市では、ミクロネシア連邦周辺海域でも漁業を行っている国内最大規模の漁業会社、大洋エアンドエフ株式会社との協力を受け、鯉節の加工工場の視察を行いました。ちょうどミクロネシア連邦ポーンペイ州にも鯉節工場建設の計画が進められているところでもあり、ピーターソン州知事は、良いタイミングで視察ができたこと喜んでいました。

奈良県では、奈良文化財研究所を訪問した他、片岡修博士の案内で平城宮跡内大極殿や東大寺の視察を行いました。モセス副議長は、ユネスコ世界文化遺産に登録されたミクロネシア連邦のナンマトル遺

跡の保存に向け、日本における文化遺産の保護事例を視察できたことは有意義であったと語りました。

本プロジェクトを通じて、ミクロネシアと日本の相互理解の増進に寄与することができました。APICは、ミクロネシアやその他の太平洋島嶼国と日本との友好関係増進のためのプロジェクトを、引き続き計画・実施してまいります。（文責：東海林）



【鹿児島県指宿市で砂むし温泉を体験する一行】



【ピーターソン州知事（前列中央）、モセス副議長（前列左から2番目）、及び APIC や駐日ミクロネシア連邦大使館、外務省関係者ほか】

6月

太平洋・リーダー招聘計画（ミクロネシア連邦）
ピーターソン州知事・モセス副議長招聘

2017年8月6日から12日にかけて、APIC 太平洋島嶼国リーダー招聘計画が実施され、ミクロネシア連邦ポーンペイ州のマルセロ・K・ピーターソン（Marcelo K. Peterson）州知事と、ミクロネシア連邦議会のエズモンド・B・モセス（Esmond B. Moses）副議長を日本に招待しました。

◆東京近郊での視察（友好議員連盟・上智大学他）

訪日日程の前半は東京近郊での視察を行い、日本・太平洋島嶼国友好議員連盟訪問、上智大学訪問、川崎市浮島処理センター視察、東京文化財研究所訪問を行いました。

日本・太平洋島嶼国友好議員連盟では、同連盟事務局長の山際大志郎衆議院議員と面会し、モセス副議長との間で活発な意見交換が行われました。上智大学を訪問した際は、アガスティン・サリ学生総務担当副学長と面会し、ザビエル留学生の上智大学での受け入れに対し、ピーターソン州知事から感謝の言葉が伝えられました。

川崎市浮島処理センターでは、日本のごみ分別やごみ処理技術の視察を行いました。ミクロネシアではごみを分別して捨ててリサイクルを行うという習慣が国民にないため、ごみによる環境悪化が発生している。

ています。今回の視察でピーターソン州知事は、ごみ分別の規範を教育によって住民に広めていくことの重要性を再認識したと語っていました。

今後視察で得られた知識がミクロネシアの環境問題改善に活かされることが期待されます。



【川崎市浮島処理センターにて】

◆APIC 佐藤嘉恭理事長主催の夕食会

8月7日夜には、APIC 佐藤嘉恭理事長主催の夕食会が東京倶楽部にて行われました。日本の外務省、駐日ミクロネシア大使館の他、ミクロネシア連邦ナンマトル遺跡研究の第一人者である片岡修博士など、様々な分野でミクロネシアに携わっている方々が一堂に会する機会となりました。



【ピーターソン州知事】



【APIC 主催夕食会でのモセス副議長】

上智大学大学院地球環境学研究所との共催 上智大学にてシンポジウム開催

2017年7月20日、上智大学大学院地球環境学研究所と共催のシンポジウムが上智大学にて開催されました。



【左から：ウィリー・コストカ MCT 事務局長、デイン・ブドゥー氏、海老澤陽子氏、織朱美教授】

本シンポジウムのゲストスピーカーとして、西インド諸島大学(UWI)海洋実験所からデイン・ブドゥー氏(Dr. Dayne Buddo)、ミクロネシア自然保護

基金(MCT)からウィリー・コストカ(Willy Kosaka)事務局長、UNDPバルバドス・東カリブ地域事務所から日・カリブ気候変動パートナーシップ計画のマネージャーを務める海老澤陽子氏をお招きしました。上智大学からは、地球環境学研究所よりあん・まくどなるど教授と織朱美教授が参加しました。開会の挨拶は、上智大学大塚寿郎副学長とAPIC佐藤昭治常務理事が務め、第一部ではゲストが各々の専門分野に関するプレゼンテーションを行い、第二部ではプレゼンテーションに対する質疑応答の時間が設けられました。

MCTのコストカ事務局長からは、ミクロネシア、パラオ、マーシャル、グアム、北マリアナ諸島が、太平洋島嶼国の生物多様性を保全し、持続的な自然資源の利用を図るため、共通の環

境保護戦略として取り組んでいる「ミクロネシア・チャレンジ」(Micronesia Challenge)の概要(それぞれの沿岸海域の30%と陸域の20%を2020年までに有効な保護下に置いて、環境保護を図る運動)についてプレゼンテーションがありました。

ブドゥー氏は近年、カサゴがジャマイカの海に繁殖し、生態系に影響を与えているという事例についての紹介や、環境に関心を持った芸術家、科学者などが所属する組織が行っている海洋保護の普及活動について映像によるプレゼンテーションを行いました。

UNDPの海老澤氏は、日本政府が平成26年7月に、カリブ8か国に対する環境・気候変動対策無償資金協力「気候変動に対応するための日・カリブパートナーシップ計画(UNDP連携)」の概要について説明しました。

第二部では織教授が司会を務め、会場からの質問にスピーカーがコメントを行いました。シンポジウムには同校の大学院生が多く出席しており、積極

的に質問をするなど、環境に対する熱心な様子が見受けられました。

本セミナーには、アリコック駐日ジャマイカ大使、マタイトガ駐日フィジー共和国大使も参加され、参加した学生に対して、環境問題は専門家だけの話ではなく、学生の立場、個人の立場でも環境問題に関心を持って、できることに取り組んでほしいというメッセージを送りました。(文責：大野)



【左：アリコック駐日ジャマイカ大使 右：マタイトガ駐日フィジー大使】

APIC・麗澤大学学生交流企画 ミクロネシア短期大学からの 学生招待計画

2017年9月から、ミクロネシア連邦唯一の国立高等教育機関であるCollege of Micronesia FSM (COM-FSM)より日本語を学ぶ学生を1名日本へ招待し、半年間、麗澤大学の寮で生活しながら外国語学部特別聴講生としてさらに日本語の学びを深めるプログラムを新たに開始しました。

本プログラムの一人目としてカチューゴ・ジョー (Katchugo Joe)さんが選ばれました。本留学体験を通じて身に付けた日本語能力及び日本での経験を活かし、母国の観光関連事業に従事することを通じて、ミクロネシア連邦の観光産業の発展に貢献することを目指します。下記は本人のこれまでの日本生活で感じたことと、留学における目標です。(文責：太田)



【日本人学生と共に訪問した浅草にて】



カチューゴ・ジョーさん
Katchugo Joe

私にとって海外留学はまたとない貴重な機会です。ただ外国で教育を受けるだけでなく、行ったことのないような場所や、もう二度と訪れないかもしれない場所を冒険できるのも留学ならではの経験です。他の国から来た学生達と勉強することは新たな勉強・研究方法の発見につながります。さらに、留学は語学力を伸ばす絶好の機会にもなります。そして、他の留学生と異文化交流をすることはかけがえのない経験です。

日本での生活は一瞬一瞬が新しい発見や異文化との出会いで満ちています。家族や親戚、親友のいない生活は少し辛い時もありますが、そういった経験もしたほうがいいと思います。このような環境で生きていくことで、私自身成長したと感じました。私が今いる環境では、親しみやすく誠実な方々との出会いがあり、行動ひとつひとつが他者に対する敬意や忠誠、おもてなしといった美しい日本文化を映し出していて、そこでは、深い尊敬の心と細かな気配りを持って食事が提供されます。日本人の多くがキリスト教の信仰を持っ

ていないことには驚きましたが、それも貴重な発見のひとつです。

来日したばかりの頃は、英語が上手く話せない日本人学生とコミュニケーションをとることが難しく感じたこともありましたが、最近は慣れてきました。このように、日本語を読み、理解し、書く方法を勉強できるのはとても良い機会だと私は思います。なぜなら、私はいつの日かまた日本に戻ってきて、自分の力でもっと多くの冒険をするかもしれないからです。日本の伝統的な寺院や神社を訪れる際には、日本語の知識や能力があれば、日本の歴史に対する理解をより深めることができるかも知れません。

日本での生活は苦勞を伴うこともありますが、とても楽しいですし、得られるものも多いです。APICには心より感謝申し上げます。この奨学金がなければ、私の故郷コスラエ島からの初めての留学生として、麗澤大学で多くを学ぶ機会も得られませんでした。皆様が与えて下さった全てのことに感謝いたします。引き続き、精一杯、勉学に励みたいと思います。この留学経験は、短い期間かもしれませんが、私にとって永遠の宝物になると思います。「人生を変えるきっかけにNoとは絶対に言うてはいけません。なぜなら、後悔するから」

(APIC 和訳)



【ナンマトル遺跡を見学中の学生たち】

9月

上智大学ミクロネシア・エクスポージャーツアー

上智大学及び上智短期大学部は、国立ミクロネシア大学（COM・FSM）との間で結ばれた協力協定に基づき、2015年より毎年9月にミクロネシア異文化体験ツアーを実施してきましたが、2017年度より上智大学の正式科目「ミクロネシア・エクスポージャーツアー」として単位化されました。上智大学の学生は、本ツアーに参加して所定の成績を修めることで全学共通科目として2単位が付与されます。

本ツアーは、APICの佐藤昭治常務理事（上智大学グローバル教育センター客員教授）が担当教員として引率し、学生はCOM・FSMの学生寮に滞在しながら、現地の有識者による特別講義を受けた他、ミクロネシアのユネスコ世界文化遺産ナンマトル遺跡やミクロネシア連邦議会を訪れるなど、ミクロネシアの歴史・文化・社会を肌で感じる体験学習をしました。

現地講義では、エマニエル・モリ前ミクロネシア連邦大統領や堀江良一在ミクロネシア日本国大使らを講師に招き、ミクロネシアの歴史・文化・日本との関係について学びました。また、ミクロネシアのユネスコ世界文化遺産ナンマトル遺跡については、ミクロネシア連邦政府歴史保存局のアガスティン・コーラー氏による講義を受けた後、現地のガイドによる引率で遺跡の見学を行い、ナンマトル遺跡の偉

大さや不思議さを間近で体験するとともに、貴重な遺跡を保存していくことの重要性について理解を深めました。

現地での体験学習の最後に、学生たちは2泊のホームステイ体験をしました。それぞれのステイ先で、シュノーケリング体験や魚釣り、島中の親戚が集まる夕食会などを通して、学生たちはミクロネシアの文化や伝統の他、人々の温かい優しさに触れることができました。

帰国後、学生たちはレポート作成及び事後報告会を行いました。今後ミクロネシアのために自分ができることをしていきたい、と述べる学生が多くいました。本ツアーは、ミクロネシアと日本の今後の友好関係の増進という観点でも、非常に意義あるものになりました。（文責：東海林）

滞在中のスケジュール

9/10(日)	ミクロネシア連邦ポンペイ州着
9/11(月)	オリエンテーション 講義①（佐藤昭治元ミクロネシア大使） 講義②（COM-FSM メイソン氏）
9/12(火)	在ミクロネシア日本国大使館 訪問 講義③（堀江良一駐ミクロネシア大使） 講義④（モリ前ミクロネシア大統領）
9/13(水)	講義⑤（ミクロネシア連邦政府歴史保存局 アガスティン・コーラー氏） ナンマトル遺跡、ケブロイの滝見学
9/14(木)	連邦議会（開会式）傍聴、ロバート外務大臣表敬及び同大臣による講話 講義⑥（ジョン・ハグレレルガム元大統領） 講義⑦（MCT コストカ事務局長） 伝統行事「サカオ」体験
9/15(金)	ホームステイ体験
9/16(土)	ポンペイ州出発
9/17(日)	日本着

参加学生の声

上智大学総合グローバル学部2年

塚本遼さん

私は今回のツアーには、あまり知名度が高いとは言えない国への見識を深めたいという思いから参加を決めました。実際に現地へ赴いてからはまず、在ミクロネシア日本大使や元大統領などといった方々から直接講義を受ける貴重な機会があり、ミクロネシアが直面している様々な課題や歴史を学びました。外交の最前線での経験をお持ちの方々のお話は、同様分野を専攻している私にとって大変刺激的でした。

そして今回の訪問で最も印象的だったのは、現地の人々の心の温かさです。例えばポンペイ島に到着したのは深夜だったのにも関わらず、大勢のCOM学生たちが私たちを美しい歌とともに歓迎してくれました。バス移動中には道端の子供たちが無邪気な笑顔で手を振ってくれました。そして議会訪問の際には開会式というオフィシャルな場で、ウルセマル連邦議員（元大統領）がツアー参加学生一人一人を紹介してくださりました。見ず知らずの外国人である私たちを、このように歓迎してく

ださったことは大変感動的でした。

2泊に渡るホームステイ体験でもこのことを一層感じました。ホストファミリーは、ネッチポイントでの海水浴やマングローブ林でのカヤック、シヤカオの席など様々な場所に私を連れていってくれて自然・文化体験をさせてもらいましたが、彼らと話していると、ミクロネシアの人々は家族や隣人とのコミュニケーションをとる大切に行っているからこそ幸せな日々を過ごしているということを実感させられました。

今回のツアーには本当にたくさんの学びがありました。貴重な機会を設けてくださったAPIC、そして協力してくださった人々に感謝しつつ、今後何らかの形でこの国の人々との関わりを保つていけたらと考えています。



【ナンマトル遺跡にて。左：塚本さん】

参加学生の声

上智大学短期大学部英語科1年

大澤まりんさん

約1週間のエクスポージャーツアーは、ミクロネシア大学の寮で過ごし、そのあと1泊2日のホームステイという旅程でした。ミクロネシアに到着した時、深夜なのに学生の皆さんがあたたかく歓迎してくれました。車の中でウクレレを弾いて歌ってくれた歌がとても美しく感動しました。ミクロネシアの日常にはいつも音楽がありました。また、会う人々がおおらかで心優しい方たちばかりで、慣れない地での生活の心の支えになりました。

ミクロネシアの食事は、寮のご飯から議員の方のお家で食べたパティ料理まで、島ならではの料理を味わうことが出来ました。バナナを使った多種多様な料理や豚の頭が豪快に飾られたものなど今まで食べたことのないものばかりで、どれもとても美味しかったです。特に、シヤカオという伝統的な飲み物の味が、今でも思い出せるほど強烈でした。

約1週間のエクスポージャーツアーは、ミクロネシアの寮で過ごし、そのあと1泊2日のホームステイという旅程でした。ミクロネシアに到着した時、深夜なのに学生の皆さんがあたたかく歓迎してくれました。車の中でウクレレを弾いて歌ってくれた歌がとても美しく感動しました。ミクロネシアの日常にはいつも音楽がありました。また、会う人々がおおらかで心優しい方たちばかりで、慣れない地での生活の心の支えになりました。

ミクロネシアの食事は、寮のご飯から議員の方のお家で食べたパティ料理まで、島ならではの料理を味わうことが出来ました。バナナを使った多種多様な料理や豚の頭が豪快に飾られたものなど今まで食べたことのないものばかりで、どれもとても美味しかったです。特に、シヤカオという伝統的な飲み物の味が、今でも思い出せるほど強烈でした。

最後に、ホームステイは私の人生の中で忘れられない大切な経験になりました。ホストファミリーは不安そうに私に対して丁寧な気を配ってくれました。虹色の木を見に行ったり数少ない伝統工芸品の工房に行ったり貴重な体験をさせてくれました。ホストファミリーとは帰国後も連絡を取り合っており、今は私にとってとても大切な存在です。



【ホームステイ先での一枚。右側一番奥：大澤さん】



【講演を聞く津田塾大学高橋学長（最前列中央）】



【写真を紹介しながら講演するフロイド氏】



10~11月

津田塾大学

ミクロネシア写真展 「南洋の光」

写真展の開催にあたり、初日の16日にオープニング記念レセプションが津田塾大学小平キャンパスで開かれました。レセプションには津田塾大学高橋裕子学長を始め、津田塾大学関係者及びAPIC関係者が集いました。

また写真展の開催に併せて、学生にミクロネシアに対する理解を深めてもらうべく、津田塾大学公開講座「総合」においてAPIC佐藤昭治常務理事と、写真家フロイド・タケウチ氏による講演会が行われました。

◆佐藤常務理事による講演会

10月19日に行われた佐藤昭治常務理事の講演では、主に自身の外務省時代の経験に基づき、パキスタンとミクロネシアという対極的な2カ国が取り上げられました。核実験や暴動が絶えず殺伐とした地パキスタンでの勤務と比べて、ミクロネシアはまさにその対極であったと言えます。一人当たりのGNIは3200米ドルという貧しい国ですが、決して物質的ではない豊かな

さがあると述べました。

佐藤常務理事は、最後に「総合」のテーマ「じぶん打破—『事実』を透かして見てみたら?」に因んで、「事実とは何か」について言及しました。学生からの質問に対し、E. H. カーク「歴史とは何か」を引用し、「自分の解釈に従って事実を作り上げ、その事実に従って自分の解釈を作り上げる」という不断の過程が歴史である」と述べ、日本人がミクロネシアを忘れてしまっていることについて言及しました。一方でミクロネシアの人々は、第一次世界大戦後に日本の統治下にあったことをよく覚えていて、今もなお日本と親密な関係を求めているということです。

佐藤常務理事の講演会に出席した学生からは、「ついつい大国ばかりに目を向けがちだったが、歴史的に深く交流のあるミクロネシアを研究する意義が感じられた」とか、「ミクロネシアが日本に忘れられているという点に関して」日本は、戦争放棄を掲げてから、戦争だけでなく日本が行った歴史さえも放棄してしまっているのではないかと

と思った」といった幅広いコメントが寄せられました。また、「国を理解するには、一国として捉えるよりもその国に住む人を捉えた方がより理解できると感じた。そうしたアプローチを大切にしたい」という声もありました。

◆フロイド・タケウチ氏による講演会

10月26日に行われたフロイド・タケウチ氏の講演には、学生や地域の方を含め約200人が集いました。フロイド氏は、自身が写真を撮影する際に「美をほめたたえる」、「伝統を重んじる」、「価値観を尊敬する」という三つの柱となる価値観を大切にしているとしたうえで、これまでに撮影した写真約70枚を紹介しました。撮影の舞台となったのは「島国」。今回の写真展でも舞台の中心となったミクロネシア連邦を始め、マーシャル諸島、アメリカ領サモア、ハワイ、そして日本（東京）。どの国も何かしらの形で「統治」という歴史を共有しています。そんな島々で、それぞれの国に生きる人々の

「誇り」というものを映し出した写真と共にフロイド氏が伝えたメッセージは、集まった多くの聴講者を魅了しました。

学生からは多くの感想が寄せられました。

- ・表面的なものを切り取るだけでなく、その人の表情に内包されている「誇り」のような内面的なものを映し出すことの大切さを感じた。
- ・写真はただ思い出しの保存をするだけでなく個性も表現していて、国境を越えて世界を感じることを可能にする素晴らしいものだと思った。
- ・最高の写真を撮るためには、時折自分の後ろを見ることが大切である」という言葉は、私たちの生活にも重要なことだと感じた。
- ・フロイド氏の話を聞いて、写真はただ生活のワンシーンを切り取るだけでなく、そのワンシーンを最大限に生かして文化を伝えたりその国の特徴を伝えたりしていると感じた。

フロイド氏の講演会では津田塾大学大学院文学研究科修士課程2年の於保恵理さんが通訳を担当しました。今回の講義は津田塾大学の学生が中心となって運営され、非常に有意義なものとなりました。

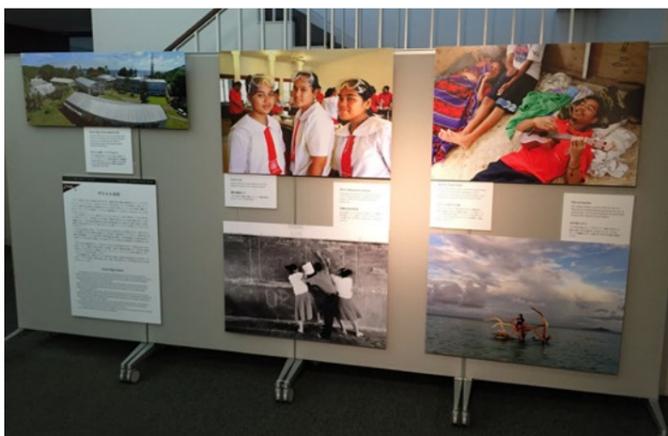
◆ミクロネシア写真展

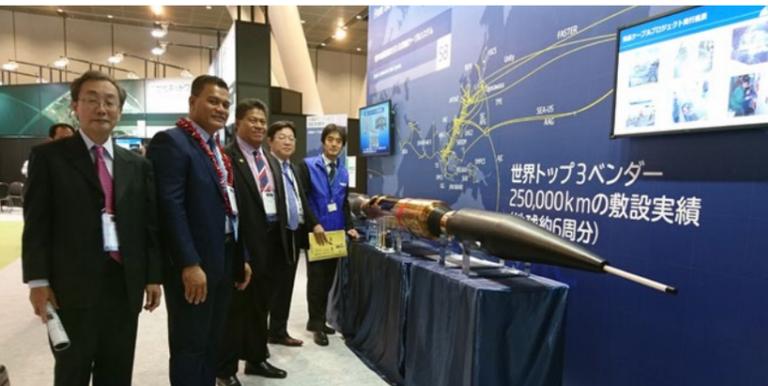
写真展では、フロイド氏の講演でも紹介された写真のうちミクロネシア連邦チューク州を舞台にした15枚の写真が展示されました。ミクロネシアにある4つの州の中で最も経済発展が遅れ、多くの人がアメリカ本土やグアム、ハワイに移住しているのが現状であるチューク州に降り注ぐ二つの光に焦点が当てられました。一つは、チューク環礁を取り巻く美しい島々にふり注ぐ鮮やかな自然の光。もう一つは、チューク州ウエノ島にあるマブチの丘を静かに照らす知識の光です。マブチの丘には、APICが支援しているザビエル高校が建っています。フロイド氏はこの二つの光は経済的困難、社会的重圧、将来への不安によって結び付けられているとしながらも、「チュークは、言葉では表せないほどの美しさを有する場所である」ということを来場者に知ってほしい」とその美しさについても言及しました。

東京・小平で開催されたミクロネシア写真展は、国際関係という大きな枠組みに興味関心を持つ津田塾大学の学生に、小国が抱える問題や美しさ、私たちが忘れかけていた国の美しさや大切さを問い直した写真展になりました。（文責：大高）



【APIC 及び津田塾大学関係者たちと】





【上：ガートナー・ジャパン（株）にて】
【中央：NEC 展示会を訪問】
【下：KDDI（株）にて】



【新幹線の車内でお弁当を楽しむ大臣（右）】

ガ大臣は海底ケーブルを利用した新事業としてコー
ルセンター事業を考えており、同社船津代表取締役
会長兼CEOの説明を熱心に聞いていました。
また、総務省の紹介で訪問した海底ケーブ
ル製造会社、株式会社OCC（Ocean Cable &
Communications）では、地上で敷設する従来型ケー
ブルと最新型ケーブルの比較説明を受け、アフアマ
サガ大臣は最新型ケーブルに高い関心を示していま
した。株式会社海外通信・放送・郵便事業支援機構
（JICT）の高島肇久取締役会長との会談では、情
報通信技術に関わる意見交換が行われ、非常に有意
義であったと、アフアマサガ大臣も非常に喜んでい
ました。

◆APIC 佐藤嘉恭理事長主催の夕食会
11月9日の夜には、APIC 佐藤嘉恭理事長
主催の歓迎夕食会がホテルニューオータニ宴会
場にて開催され、訪問先企業役員その他、太平洋
諸島センター斎藤所長など関係者が一堂に会す
る場となりました。挨拶の中でアフアマサガ大
臣は、「今回の訪日中に持つことのできた会談
はどれも示唆に富み、非常に有意義であった。
アレンジをしてくれたAPICと協力してくれ
た各位に心から御礼をしたい」と感謝の言葉を
述べました。（文責：東海林）

滞在中のスケジュール

11/5 (日)	来日
11/6 (月)	APIC によるブリーフィング、明治神宮 視察 常磐興産株式会社 井上社長と面会
11/7 (火)	ソフトバンクデータセンター 視察 ガートナー・ジャパン株式会社 訪問 小林総務大臣政務官と会談
11/8 (水)	富士通株式会社 訪問 堀井外務大臣政務官と会談 KDDI 株式会社訪問、JICA 東南アジア大洋州部 訪問
11/9 (木)	NEC 展示会訪問、大日本印刷五反田ショールーム 視察、OCC 及び JTEC 訪問 APIC 主催夕食会
11/10 (金)	トランス・コスモス 訪問 福島県新白河駅へ移動、ヤフーデータセンター 訪問 スパリゾートハワイアンズ 訪問 常磐興産株式会社 井上社長と面会
11/11 (土)	東京へ移動、科学未来館 訪問
11/12 (日)	東京都内観光、離日



【中央がアフアマサガ大臣】

11月 太平洋・リーダー招聘計画 サモア通信・情報技術大臣招聘

2017年11月5日から12日にかけて、APIC
太平洋諸国リーダー招聘計画の一環として、サモア
独立国よりアフアマサガ・レプイアイ・リコ・トゥ
パイ（Atamasaga Lepuia'i Riko Tupa'i）通信・情
報技術大臣を日本に招待しました。日本滞在期間
中、アフアマサガ大臣はICT（Information and
Communication Technology：情報通信技術）関連
事業を展開している日本企業を訪問した他、福島県
のスパリゾート・ハワイアンズを訪れました。

◆外務省及び総務省訪問
現在、サモアでは、アジア開発銀行や世界銀行
などの資金を受けて、光通信の海底ケーブルを設
置するプロジェクトが進められています。これは、
2022年までに合計5本の海底ケーブルで太平洋
の約15ヶ国を結ぶ、大規模なプロジェクトです。在
サモアの青木伸也大使より、サモアはそのハブとし
ての役割を果たすべく、日本の光通信や海底ケーブ
ル設置に関する先端技術等に関する視察を希望して
いるという話を受け、APICにて本招待計画を実
施することとなりました。

日本滞在中、アフアマサガ大臣は、外務省を訪れ

て堀井外務大臣政務官と会談した他、総務省にて
小林史明総務大臣政務官と会談し、日本の情報通信
技術政策に関するブリーフィングを受けました。小
林政務官より、「サモアも含めたアジア・太平洋地域
におけるICTの発展に協力していきたい」との発
言があり、アフアマサガ大臣は非常に喜んでいまし
ました。ブリーフィングを担当した富永総務審議官は、
アルゼンチンで開催された国際会議でアフアマサガ
大臣に会ったことがあるとのこと、今後の協力に
ついての話し合いや意見交換は大変和やかな雰囲気
で行われました。

◆情報通信技術関連企業への訪問
また、在福島サモア独立国名誉領事である常磐興
産株式会社の井上直美代表取締役社長の協力により、
情報通信技術事業を展開する日本企業への訪問が実
現しました。ICT事業者向けのコンサルティング
を行っているガートナー・ジャパン株式会社では、日
高代表取締役社長と面会し、日本におけるICT事
業に関わる全般的なブリーフィングを受けました。
日高社長のご紹介により面会が実現したトランス・
コスモス株式会社は、海外各地域でコールセンター
の運営事業を展開している企業ですが、アフアマサ

参加した COM-FSM 学生の声

プログラムに参加した4名の学生のうち、2名の感想文を掲載しています。(APIC 和訳)

麗澤大学にて研修



クリストファー・シグラ さん
Christopher Sigrah

私は自分の目標を第一に考え行動する人間です。日本に来られるなんて思ってもいませんでした。この交換留学プログラムの参加者として選ばれ、日本を訪問できることを光栄に思い、感謝しています。日本を訪問したことは昨日のように感じられます。滞在中起こったことを全て覚えているからです。このプログラムはとても勉強になり、目を開かせるもので、気温は寒かったですがそれもまるで初めて体験したかのように楽しめました。

日本滞在中、多くのことに驚き、感動しましたが、その中でも日本の自然には特に驚きました。日本は活気があり、よく発展した国ですが、自然も生き生きとしていて、その様子をよく見ることができます。日本の人々は、自然を大事にしているようで、環境への配慮がよく行われています。私の出身地ヤップ島は、ミクロネシアの他の島々も含めてですが、田舎の典型で、発展が遅れていて、人口も少なく、天然資源が豊富にあります。ミクロネシアは未来の世代について長期的な目で考える必要があります。私たちは、島国というより「海国」として知られています。日本での思い出や学んだこと、出会った人々、そして彼らが環境に対する意識が高いということなどをどこへ行っても誰に会っても伝えようと思います。

私はこのプログラムに参加してたくさんの方のことを学びました。APIC にはずっと感謝し続けます。私を受け入れてくださったホストファミリー(塚本さん)には深い感謝を申し上げます。私はとても歓迎されました。このプログラムが継続され、未来の学生が私の様に日本に来て、学び、楽しむことを期待します。

滞在中のスケジュール

10/30 (月)	来日
10/31 (火)	オリエンテーション 大学祭準備
11/1 (水)	ウェルカムパーティ 大学祭準備
11/2 (木)	大学祭準備
11/3 (金)	大学祭
11/5 (日)	
11/6 (月)	休日
11/7 (火)	授業
11/9 (木)	
11/10 (金)	上智大学で環境セミナー受講
11/11 (土)	ホームステイ体験
11/12 (日)	ホームステイ体験
11/13 (月)	授業
11/14 (火)	校外学習
11/15 (水)	APIC 主催レセプション
11/16 (木)	離日

上智大学短期大学部にて研修



デスティニー・エトウセ さん
Destiny Etse

私は小学生の頃からずっと日本に行きたいと思っていました。このプログラムについて知ったのは、私の部活の顧問が「日本に行くことに興味はあるか」と学生たちに聞いていたときでした。私は興味があったのですが GPA の基準について知ったときは少しためらってしまいました。少し悩みましたが、試しに申し込んでみることにしました。日本での都会の暮らしはどんな感じだろうといつも気になっていました。賑やかな人通りや有名な地下鉄の人だかりなどが想像できます。小さな島国出身の人が、のんびりしたライフスタイルから、日本の忙しく、時間の流れの早い生活に直面したとき、どのように対応するかとても興味深いと思いました。

私が参加者として選ばれたと知ったときの喜びは想像し易いでしょう。ついに世界を見ることが出来るのだと思いました。もっと素晴らしいことに、私にとって初めて訪れる外国が日本だったのです。日本について思ったことを説明するには言葉が足りませんが、寒い、楽しい、疲れる、冒険に満ちている、目を見張るよう、そして特に、美しいと感じました。私がこれまでに目撃したものの中で、日本が一番美しく整頓され、活気に溢れ、多様な文化を持っていると思いました。COM-FSM の代表として日本に来られたことを光栄に思います。日本で新しい友達を作ることができました。彼らには将来また会えることを期待しています。このような素晴らしいプログラムを企画して下さった APIC、そして上智大学短期大学部の親切なおもてなしには感謝しています。Kalahngan. (ポンペイ語で「ありがとう」の意味。)

滞在中のスケジュール

10/30 (月)	来日
10/31 (火)	オリエンテーション、 キャンパスツアー、 歓迎レセプション
11/1 (水)	休日
11/2 (木)	社会人育成プログラム (ディズニーシーにて)
11/3 (金)	休日
11/4 (土)	校外学習 (箱根)
11/5 (日)	休日
11/6 (月)	授業
11/9 (木)	
11/10 (金)	上智大学で環境セミナー受講
11/11 (土)	ホームステイ体験
11/12 (日)	ホームステイ体験
11/13 (月)	授業
11/14 (火)	授業
11/15 (水)	APIC 主催レセプション
11/16 (木)	離日



【最終日のレセプションパーティーにて】

2017年10月30日から11月17日にかけて、APICの支援により、ミクロネシア短期大学(COM-FSM)から4名の学生が日本に約3週間の短期留学をしました。4名のうち2名の男子学生は麗澤大学にて、2名の女子学生は上智大学短期大学部にてそれぞれ講義を受講するとともに、日本人学生との交流やホームステイ等を体験しました。

麗澤大学では、同大学の大学祭に参加し、秋葉原や浅草、上野の観光や温泉などの日本文化を体験しました。また、同大学内ミクロネシア環境教育チームのミーティングに参加し、日本人学生と交流しました。上智大学短期大学部では、地域のお祭りに参加し、小田原城やデイズニールランドといった観光地を訪れ、日本での滞在を満喫しました。さらに合同研修として、4名揃って上智大学にて同大学大学院卒業生による環境学の講義を受けました。最終日の11月15日には、上智大学四谷キャンパスにてAPIC主催のレセプションパーティーが開かれ、駐日ミクロネシア大使館関係者の方々のご臨席のもと、杉村美紀上智大学副学長、山本浩上智短期大学学長、成瀬猛麗澤大学教授他、本プログラムをサポートした日本人学生、APIC関係者らが参加し、親睦を深めました。上智大学グリーンクラブによる男声合唱の披露や、同大学ミクロネシア・エクスポージャーツアー参加学生が作成したスラ

10~11月

COM-FSM 学生招待計画
麗澤大学及び上智短期大への短期留学



【来日時の学生たち】

インドショーが流れ、会場は盛り上がりを見せました。今回は昨年に引き続き、2回目のCOM学生を受け入れとなりました。プログラムに参加した学生にとっても、日本人学生にとっても貴重な体験となりました。これからも学生同士の繋がりを大切に、ミクロネシアと日本の交流の更なる発展を期待します。



【ザビエル留学生たちと】

「ミクロネシア短期大学」
1972年にミクロネシア連邦に設置された2年制の大学。教養学科のほか海洋学科、ミクロネシア研究学などの学科があります。ミクロネシア連邦の各州から学生が集い、ミクロネシア連邦の発展を支える国内唯一の高等教育機関として存在感を示しています。



【津田塾大学にて。左：バリトー学長、右：津田塾大学高橋学長】

◆地方視察（長崎・広島・京都）

日本滞在期間後半は、バリトー学長の希望で地方視察を行いました。初めに訪れた長崎では、日本におけるキリスト教と隠れキリシタンの歴史や原子爆弾の被害を目の当たりにしました。バリトー学長は、原爆の被害を間近に見るのは初めてとのこと、ひとつひとつの写真や説明書きの前で足を止め、「多くを知ることができた」との感想を述べました。次の日は広島へ移動し、原爆資料館を見学しました。夕方にはホテルにて、被爆継承者の方から被爆体験の講話を聞き、終了後には質問をするなど平和に対して大変熱心な姿勢が感じられました。地方視察の最終目的地である京都では、京都大学にて落合教授との意見交換を行ったのち、着物ショーや着物着つけ体験、茶道体験など日本の伝統文化を体験しました。京都滞在2日目には、金閣寺や二条城など日本の歴史的建造物の視察をしました。短い期間でしたが、「東京のみならず地方都市に実際に足を運ぶことで真の日本を垣間見ることができるとのバリトー学長の希望に沿う日本滞在になりました。」

◆日本での交流

人的交流の面では、外務省中南米局 高瀬寧局長主催の昼食会に出席し、同局長をはじめとする外務省関係者と意見交換および交流の時間を設けました。また、APIC主催の夕食会では、外務省関係者、各大学関係者、APIC関係者に加え、アリコック駐日ジャマイカ大使や高瀬康夫元ジャマイカ大使の参加も見ら

6月
西インド諸島大学
ケイブヒル校学長招聘

2017年6月10日から18日の約一週間の日程で、西インド諸島大学（UWI）ケイブヒル校よりバイオレット・ユードイン・バリトー（Violet Eudine Barthelemy）学長を日本へ招聘しました。本計画は、上智大学と教育連携協定（MOU）を締結している西インド諸島大学から副総長及び各学長を日本へ招聘し、上智大学との関係強化や日本の教育現場の視察による日・カリブ関係の友好的な発展を目的としたものです。今回は、カリブ諸国に3つのキャンパスを持つ同大学において初めての実施となります。

◆大学訪問（津田塾大学・上智大学・京都大学）

日本滞在中、バリトー学長は津田塾大学、上智大学、京都大学の3大学を訪問しました。津田塾大学と上智大学はAPICとMOUを締結しています。1校目の訪問先である津田塾大学では、同大学高橋裕子学長を敬訪問した後、バリトー学長の専門分野であるジェンダー論について、大学院生向けの講義を行いました。「独立後のカリブ地域におけるジェンダー的思想※」と題された本講義は、同大学院でジェンダー的、人種的マイノリティーの観点からアメリカ文化、アメリカ史、アメリカ文学などを研究している修士課程、博士課程に属する学生が受講しました。学長になって以来、学生に直に授業をする機会が

れ、有意義な交流の場となりました。

◆日本伝統文化体験

～着物着つけ体験・茶道お点前体験～

京都視察中には、着物着つけや茶道のお点前を体験しました。着物を実際に着てみて、「昔の日本女性はこんなに動きにくい恰好をしていたのか」と驚きつつも、茶道のお点前の体験時には、説明を受けながら実際にお茶を入れたり、茶室の説明を受けたりしました。お点前終了後には、「茶道の学校について」「どの様な年代や性別の学生が多いのか」とか、当日の講師に「いつから茶道の道に進んだのか」などという質問をする様子が見受けられ、バリトー学長の深い日本文化への関心を感じられました。（文責：松尾）

滞在中のスケジュール

6/10 (土)	来日
6/11 (日)	江戸東京博物館、浅草、東京スカイツリー 視察
6/12 (月)	APIC プリーフィング、外務省中南米局長との昼食会 津田塾大学訪問
6/13 (火)	渋谷、青山、明治神宮、明治記念館 視察 上智大学訪問、APIC 主催夕食会
6/14 (水)	長崎へ移動 二十六聖人記念館、原爆資料館等 視察
6/15 (木)	広島へ移動、平和公園、原爆ドーム 視察 被爆継承者より被爆講話受講
6/16 (金)	京都へ移動、京都大学にて落合教授と意見交換 日本の伝統文化を体験
6/17 (土)	金閣寺、二条城、三十三間堂視察。離日

— 西インド諸島大学 —
(University of the West Indies (UWI))
西インド諸島の17の国と地域で英語による高等教育を行う大学。3つのメインキャンパス（ジャマイカのモナ校、トリニダード・トバゴのセントオーガスティン校、バルバドスのケイブヒル校）の他、通信制のオープンキャンパスが各地にあり、英語を公用語とするカリブ諸国における最古にして最大の高等教育機関として、様々な分野に人材を輩出している。

少なかったバリトー学長は、久しぶりの教授職を通して日本の学生との意見交換を大変楽しんだようです。大学の訪問先として2校目となる上智大学では、同大学大学院地球環境学研究所のあん・まくどなるど教授との意見交換の後、上智学院高祖敏明理事長と同大学睦道佳明学長を敬訪問し、両大学の今後の更なる教育連携に向けて意見交換を行いました。上智大学とUWIは、これまでに二度実施された太平洋・カリブ学生招待計画において学生派遣側（UWI）と学生受け入れ側（上智大学）の関係にあります。また、同学生招待計画で2016年に来日したケイブヒル校の卒業生であるシェキラ・トンプソン（Shekia Thompson）さんが2017年9月より上智大学大学院に進学予定ということで日本に滞在しており、バリトー学長と同大学で面会しました。3校目の訪問先となる京都大学では、バリトー学長と研究分野が近い同大学 落合恵美子教授と学術的な意見交換を行いました。バリトー学長はカリブ地域を中心に、落合教授は日本を中心に、双方がそれぞれの地域のジェンダー論や実情を述べ、終盤には自らの著書を贈り合う場面も見受けられるなど、活発な意見交換の場となりました。



【京都大学落合恵美子教授（左）と意見交換をするバリトー学長（右）】



【長崎市、大浦天主堂前にて】

※ 原題 "Ideological Relations of Gender in the Post-Independent Caribbean"

西インド諸島大学卒業生 シェキータ・トンブソンさん

西インド諸島大学(UWI) ケイビル校の卒業生で、「太平洋・カリブ学生招待計画2016」の参加者であるシェキータ・トンブソン (Shekita Thompson) さんにインタビューを行いました。【聞き手：松尾】

Q1・自己紹介をお願いします。

みなさん、こんにちは。私はシェキータ・トンブソンと申します。バルバドス出身です。UWIでの専攻は経済学でした。この秋から進学する上智大学での修士課程では、国際経営学と開発学を学ぶ予定です。この度は、カリブ地域の発展途上国における資源経済をテーマとした研究計画書を提出して、文部科学省が実施している奨学金に採用され、国費留学生として日本で勉強することになりました。今は国費留学生が受ける、東京外国語大学での日本語の短期集中講座をちょうど終えたところです。

Q2・APICが実施している太平洋・カリブ学生招待計画に参加しようと思ったきっかけは何ですか。

最初のきっかけは、UWIでの指導教授に「日本語を勉強してみない？」とメールをもらったことです。私はそれまで日本語を勉強したことはありませんでしたが、日本アニメのNARUTOをよく見ていましたし、興味があったので、喜んで参加してみようと思いました。当時、バルバドスに日本の大使館はなかったため、

館はなかったもので、まさか日本でのプログラムとは予想していませんでした。申し込みから数週間後、教授から日本に行くことを知らされ、不安もありましたが、プログラムがしっかりとしたものだと思い、行く決心をしました。当時の私は、日本の文化をあまり知りませんでした。日本は世界有数の経済大国ということもあり、アベノミクスなど日本の経済的な側面は授業でたびたび取り扱われていたため、その現場を見てみたいという好奇心もありました。

Q3・プログラムの前後で何か変わったことはありましたか。

自分自身が大きく変わったと思います。参加する前はアジアで大学院生活を送ろうとは考えておらず、多くのバルバドスの学生がそうであるように、私もイギリスの大学院への進学を考えていました。ですが、一度日本に来てみて、上智大学はとてもいい大学だと思いましたし、日本で大学院へ通うのもいいのではないかと考えるようになったのです。そして、帰国後に友人から文科省の奨学金制度について教えてもらい、応募しました。以前は、バルバドスにおいてアジアの留学先としてメジャーな中国へさえも留学は考えていなかったのですが、日本で実際に勉強することを決心したのは、私自身が大きく変わった証だと思えます。

Q6・日本の大学院に進学するというシェキータさんの進路は、UWIの他の学生の進路とは大きく異なるものですか。また、友人やご家族の反応はどのようなものでしたか。

日本で学ぶ一番の理由です。また、英語圏でない日本は、英語圏と比べて私にとってはとてもユニークで、全く未知の文化を体験できるという点で日本を選んでよかったですと感じています。例えば、バルバドスの人々はあまり保守的でないのに対し、日本人の人々は非常に保守的であることや、日本人の親切さはバルバドスにはないものであるなど、学ぶことが多くあります。

Q5・今回はどのようにして日本で勉強する機会を得たのですか。

文科省の国費留学生として日本で勉強する機会を頂いたのですが、国費留学生として採用されるのは大変難しく、長いプロセスが必要でした。ですので、学生招待プログラム終了後、バルバドスに戻って日本の大学院に進学することを決めたらすぐに応募書類の作成に取り掛かりました。そして、無事奨学金にも合格し、第一志望であった上智大学からも入学許可を頂き、日本の大学院の進学が決定したのです。



【短期集中講座を受けていた東京外国語大学にて】

私はなかつたので、まさか日本でのプログラムとは予想していませんでした。申し込みから数週間後、教授から日本に行くことを知らされ、不安もありましたが、プログラムがしっかりとしたものだと思い、行く決心をしました。当時の私は、日本の文化をあまり知りませんでした。日本は世界有数の経済大国ということもあり、アベノミクスなど日本の経済的な側面は授業でたびたび取り扱われていたため、その現場を見てみたいという好奇心もありました。

写真は掲載されている新聞の写真を送ってくれるなど、みんなとても協力的で、私を誇りに思ってくれています。

Q7・日本留学中の目標を教えてください。

修士号を取得することに加えて、日本語が話せるようになるということ、生活面において独り立ちできるということが目標です。日本語能力は、日本語能力試験においてN2[※]を習得できるぐらいまで伸ばせたらと思っています。

Q8・現時点での将来の目標を教えてください。

上智大学での修士課程を終了したら、開発購買(利益創出活動)や基金収集をどのようにデザインするのか、それにはなにが必要なのか、どのように判断を下すのかなどを問近で学べるような組織で働いた後に、博士号を取りたいと考えています。将来の大きな目標としては、開発、再生可能エネルギー、グリーン経済の分野において専門知識を身に付け、経験を積み、それらを母国に持ち帰ることにより、バルバドスの発展に貢献したいと思っています。

私が応募した時と比べると断然知名度が上がっていて、多くの学生が日本での一ヶ月間の留学の機会を手にしたかと思つていようです。今までは、経済学専攻の学生が選ばれる傾向にありましたが、より多くの学生に開かれたものになればと思います。



【上智大学でUWIバリーター学長と面会した際の写真。右：シェキータさん】

※ 「日常的な場面では使われる日本語の理解に加え、より幅広い場面では使われる日本語をある程度理解することができる」レベル。(日本語能力試験公式ホームページより引用)

西インド諸島大学 セント・オーガステイン校学長招聘

2017年9月22日から30日の日程で、西インド諸島大学（UWI）セント・オーガステイン校よりブライアン・コーブランド（Brian Copeland）学長を日本へ招待しました。本事業は、上智大学と教育連携協定（MOU）を締結している西インド諸島大学から副総長および各校の学長を日本へ招待し、上智大学を始めとする日本の大学との関係強化やカリブ関係の友好的な発展を目的としたものです。

◆3つの視察目的

コーブランド学長は、訪日の主な視察テーマとして、①「大学発ベンチャー（知的財産の事業化）」、②「中小企業の起業支援」、③「近代農業及び先端農業技術」の3つを挙げており、9月25日から27日にかけて、これらに関する視察を行いました。まず、大学発ベンチャーに関わる視察先として、早稲田大学を訪問し、森田国際担当理事、島岡研究推進部産学官研究推進センター准教授との懇談の後、酒匂同センター課長からブリーフィングを受けました。同大学は、ベンチャーの創出・支援に関わる産学官連携活動において先進的な取り組みをしており、大学の知的財産をいかに社会へ還元し、産学官の連携活動を通じたイノベーションを起こすか、等について、活



【夕食会にて記念品を渡すコーブランド学長（右）と受け取るAPIC 佐藤嘉恭理事長（左）】



【早稲田大学にて。左がコーブランド学長】

林経営企画室長から説明を受けたコーブランド学長は、「大学の研究成果の事業化に関して、西インド諸島大学はまだ制度が十分に整備されていない。その点において非常に参考になった」と感想を語っていました。

9月27日、3つ目の視察テーマである「近代農業及び先端農業技術」に関連して、コーブランド学長は株式会社ルートレック・ネットワークスの実証実験農場を訪れました。同社の「ゼロアグリ」（最新のICT技術を用いて世界水準の点滴灌漑を誰にでも使えるようにした施設栽培システム）について説明を受けた学長は、センサーやデータなどを駆使した最先端の農業技術に、大変強い印象を受けた様子でした。

◆防災に関する視察と上智大学訪問

9月28日には気象庁を訪問し、津波や台風、地震の発生を監視し、直ちに関係各所に通知するオペレーション室などを視察しました。トリニダード・トバ



【上：(株)ルートレック・ネットワークスの実証実験農場視察中の学長】

【下：「Stars on Pan」リーダーの飯野顕氏 他3名のメンバー】

ゴは日本と同様に地震や津波などの自然災害の多い国であるので、コーブランド学長はこれらの説明を大変熱心に聞いていました。同日午後は上智大学を訪問し、同大学暁道学長と面会・意見交換を行いました。暁道学長とは専門分野が近いこともあって話が弾み、今後ますます両大学の交流を深めていくことを約束しました。

◆日本のスチールパン・バンドとの懇談

スチールパンはトリニダード・トバゴで発明された打楽器で、同国では「国民楽器」として正式に認められているものですが、コーブランド学長のご希望により、9月28日の夕、日本のスチールパンバンド「Stars on Pan」のメンバーとの懇談を行いました。コーブランド学長が、自ら特許も取得している「電子パン」について説明をすると、バンドのメンバーは皆さんとても興味深く話を聞いていました。また、楽器の調律方法など技術的な事柄についても熱心に質問をしていました。コーブランド学長は、同バン

ドがカリブの音楽文化を日本で紹介する活動をしていることについて、「とても嬉しいし、感謝したい」と語っていました。

◆京都視察

9月29日は、地方視察として京都を訪れ、金閣寺及び二条城を視察しました。同行したAPIC佐藤昭治常務理事主催の昼食会では、京風のお弁当の他、抹茶と和菓子も堪能し、忙しいスケジュールの中、つかの間の休息を楽しんでいました。日程の都合で日帰りの京都視察となりましたが、往復の新幹線も含め、コーブランド学長には大変楽しんでいただけだと思います。（文責：東海林）



【金閣寺にて】

滞在中のスケジュール

9/23 (土)	来日
9/24 (日)	東京都内 視察
9/25 (月)	明治神宮、明治記念館 視察 早稲田大学 訪問、APIC 主催夕食会
9/26 (火)	江戸東京博物館 視察、東京都立産業技術研究センター 訪問、MEGA WEB 視察
9/27 (水)	株式会社ルートレック・ネットワークスの実証実験農場「明治大学黒川農園」訪問、日本科学未来館 視察
9/28 (木)	気象庁 訪問、上智大学 訪問 スチールパン・バンド「STARS ON PAN」メンバーとの懇談
9/29 (金)	京都へ移動、京都市内 視察
9/30 (土)	離日

7月 ジャマイカ教育・青年・情報大臣招聘

2017年7月9日〜14日の日程で、ジャマイカよりルエル・B・リード (Ruel B. Reid) 教育・青年・情報大臣を日本へ招待しました。また、グレース・マクレーン教育・青年・情報省教育審議官、フリッツ・ピノックカリブ海事学校校長、ラトヤ・ハリス国家教育基金局長、ゲイル・アン・ドンウェル教育省ディアシヤ担当コンサルタント、ナイアシャ・スミス大臣秘書の5名も同時に来日しました。

◆ 日本での交流を通して

日本滞在中、リード大臣は文部科学省を訪問し、日本におけるIT教育および防災教育のプリーフィングを受けたのち、日本側のカウンターパートである松野博一文科科学大臣を敬訪問しました。また、外務省では、武井俊輔外務大臣政務官を敬訪問しました。松野文部大臣、武井外務政務官との意見交換は、日ジャマイカの教育における交流および外交に関して、短い時間ながらも、今後につながる有意義な交流となりました。

◆ 日本の教育現場視察（上智大学・多賀城高等学校・東京海洋大学・小石川中等教育学校）

リード大臣の日本滞在中の一つの大きな柱となった教育現場の視察では、APICと教育連携協定（MOU）を結んでいる上智大学に

加え、東京海洋大学、宮城県立多賀城高等学校、都立小石川中等教育学校を訪問しました。最初の訪問先である上智大学では、睡道佳明学長を訪問しました。同大学とMOUを締結している西インド諸島大学（UWI）は、ジャマイカに本校を設置しています。ジャマイカと日本における教育を通じた交流を促進し、発展させていることについて、リード大臣から感謝の言葉が述べられました。

二つ目の訪問先となった宮城県立多賀城高等学校は、日本に2校しかない防災科学科を設置している高校で、防災教育に大変力を入れています。リード大臣は、「家庭」と「保健」を切り口に再編された「くらしと安全」という授業を参観し、妊婦体験を通じて災害時のリスクについて考えました。また、同校佐々木克敬校長の挨拶に続き、同校2年の生徒が自らの取り組みを英語で説明する場面も見られました。

三つ目の訪問先としてリード大臣は東京海洋大学を訪問し、同大学竹内俊郎学長および役員の方々と懇談したのち、先端ナビゲーションシステムや電子制御式2船用ディーゼル機関の見学など、日本における海洋学教育の現場を視察しました。

四つ目の訪問先である小石川中等教育学校は、文部科学省のスーパサイエンス・ハイスクールに指定されており、先進的な理数教育を実施しています。リード大臣は、梅原章司校長による概要説明や同校生徒のし、関係者が一堂に会する機会となりました。大臣は挨拶の中で「招待してくれたAPICに対して御礼をしたい」と感謝の言葉を述べ、佐藤嘉恭理事長に対して記念品を手渡しました。（文責：中村）



【APIC主催夕食会にて。左から：リカルド・アリコック駐日ジャマイカ大使、スミス氏、マクレーン氏、リード教育・青年・情報大臣、武井外務大臣政務官、ハリス氏、ドンウェル氏、APIC 島内憲評議員、ピノック氏】



【多賀城高等学校(上)と小石川中等教育学校(下)にて】

英語による施設案内を聞き、非常にハイレベルな教育が行われている、と感心していました。

◆ ジャマイカ関連企業訪問

リード大臣はジャマイカと結びつきの強い事業を展開する企業としてUCC上島珈琲株式会社の東京本部、丸紅株式会社を訪問しました。

UCC上島珈琲株式会社では、開校10周年を迎えたコーヒアカデミーの見学後、同社主催の昼食会が開催されました。見学中には最新のコーヒーマシンなどを紹介され、日本でもとても人気がある「泡立ちアイスコーヒー」を試飲されました。また、上島社長との懇談ではリード大臣から「気候変動の影響を受ける中、今後とも日本とジャマイカが協力してコーヒの安定生産に努めたい」とのコメントがありました。

丸紅株式会社では、同社の電力部門による再生可能エネルギーのプロジェクト、小規模発電、ジャマイカ

における電力需要、GPS導入、観光振興などについて幅広い情報、意見交換がなされました。リード大臣は、「丸紅との重要なパートナーシップを認めたいうえで更なる投資を期待する」と今後の展望を述べました。引き続き、同社主催による夕食会が開催されました。

◆ 東日本大震災の被災地視察（宮城県多賀城市）

観光を主要産業とするジャマイカにおいては、天災による被害は死活問題になるという強い危機感があります。リード大臣は多賀城市にて菊地健次郎市長との面談、被災地の視察を行いました。多賀城市はすべての学校への耐震工事をちょうど終えたばかりだったため地震による被害はなかったとの説明に感心する場面もありました。大臣からは製造業へのダメージからの回復について質問が挙がり、多賀城市の製造業の話題に発展しました。

大臣は続いて、多賀城市にある史跡を視察されました。末の松山は百人一首の歌となっています。869年の貞観地震を受けても津波が届かなかった松山こそがこの末の松山なのです。東日本大震災の際も、末の松山に津波が到達することはありませんでした。末の松山、多賀城趾に大津波の歴史が関係しているとの説明に大臣は深く感銘を受けた様子でした。

◆ APIC主催夕食会

7月10日の夜に、APIC佐藤嘉恭理事長主催の歓迎夕食会が東京倶楽部にて開催されました。夕食会には、リード大臣の訪問先企業や教育機関の他、駐日ジャマイカ大使館よりアリコック大使、外務省より武井俊輔外務大臣政務官と高瀬寧中南米局長（当時）が出席



滞在中のスケジュール

7/9 (日)	来日
7/10 (月)	APICによるプリーフィング武井外務大臣政務官表敬、目黒雅叙園 百段階段 視察 APIC主催夕食会
7/11 (火)	UCC 上島会長と面会、上智大学 訪問、文部科学省 訪問、松野文部科学大臣 表敬、丸紅東京本社 訪問
7/12 (水)	仙台へ移動、多賀城市役所 訪問 末の松山、多賀城政庁跡 視察
7/13 (木)	宮城県立多賀城高等学校 訪問 東京へ移動
7/14 (金)	東京海洋大学、都立小石川中等教育学校 訪問 離日

9月 バルバドスへ アニメ専門家派遣

2017年8月31日～9月6日、神田駿河台に本部を置くデジタルハリウッド大学大学院の高橋光輝准教授をバルバドスに派遣し、9月2日、3日の2日間にわたって現地で開催されたアニメのイベント「アニメコン(AnimeKon)」において、日本のアニメについてのプレゼンテーションを行い、併せて、西インド諸島大学(UWI) ケープヒル校において講義を行いました。APICからは荒木理事・事務局長が同行しました。



バルバドスのサンディフォードセンターで2日間にわたって開催された第8回アニメコン「[In]gless」では、アシスタントとして同行した同大学マイケル・ブランドス助教と共に、高橋准教授による日本アニメの特徴やアニメ産業についてのプレゼンテーションが行われました。カリブ諸国では日本のアニメに対する関心が非常に高く、初の日本からのアニメ分野の専門家派遣という点で、会場には老若男女問わず、両日共に120名を超える人が訪れ、盛り上がりを見せました。会場では他のイベントも行われていて、参加者の中にはコスプレをしている者や、自作の作品を会場に持ち込み同准教授のコメントを求めるなど、アニメに対する関心の高さがうかがえました。

9月4日には、UWI ケープヒル校において、主に同校の芸術学部学生を対象に、アニメコンでのプレゼンテーションを纏める形で高橋准教授が2時間の講義を行いました。会場が満席になる約50名の参加者が集まり、熱心に講義を聞いていました。講義のあとには積極的な質疑応答が行われました。

翌日には、6月末にAPICによる招待で来日した同校バリトール学長と面会し、今回の訪問の報告を行いました。カリブ地域におけるアニメの分野はこれから発展していくことで、高橋准教授には、是非またバルバドスを訪問し、アニメに関する専門家育成のため指導していただきたい、という旨を学長は述べました。

も取り上げられたほか、現地の唯一の国営放送である朝のニュース番組CB(C(カリビアン・ブロードキャスト)ング・コーポレーション)に、高橋准教授と荒木理事・事務局長が出演し、今回の訪日の目的やAPICの活動についてインタビューを受けました。インタビューの中で高橋准教授は、将来的にバルバドス人によるバルバドス・オリジナルのアニメ制作が実現することと希望する等の旨を述べました。

※1 「西インド諸島大学ケープヒル校学長招聘計画」(本誌21ページ参照)。

9月 カリブ 環境セミナー2017

2017年9月18日、19日に、バルバドスにある西インド諸島大学(UWI) ケープヒル校、上智大学及び在バルバドス日本国大使館との共催で環境セミナー及びワークショップが開催されました。日本からはAPIC島内憲評議員と、上智大学大学院地球環境学研究所あん・まくどなど教授が本セミナーに参加しました。

APICは、2015年7月に上智大学と共催で「太平洋地域における環境保全シンポジウム」を開催して以来、環境セミナーシリーズとしてパラオ(2015年8月)、ジャマイカ(2016年10月)、マーシャル諸島(2017年3月)と各地でセミナーを開催してきました。今回、カリブ地域では2回目となるセミナーをUWI ケープヒル校にて開催しました。

9月18日に行われたワークショップでは、テーマ「The Role of Research Partnerships in Promoting Sustainable Development」をもちに、パネルディスカッションが行われました。近年問題となっているサルガッスム海藻の大量発生による被害防止対策と資源利用、中米カリブ地域における生物多様性保護、漁業振興等に関するバルバドス側関係者がプレゼンテーションを行い、これに対して、まくどなど教授がコメントする形で活発な議論が行われました。



【ワークショップの様子】

今回の環境セミナーは、我が国とバルバドスの研究者・専門家を集めるという初の試みがありました。結果として、ワークショップ、セミナーともに、UWI、ケープヒル校資源管理・環境学センター(CERMES)、バルバドス側関係機関、外交団等から約20名の参加を得て、有意義かつ質の高い意見・情報交換の場となりました。また、セミナーに関しては、バルバドスの主要日刊紙が紙面を大きく割いて報道し、広報効果もあげることが出来ました。(文責：加藤)

田光彦在バルバドス大使及びAPIC島内評議員による開会の挨拶に引き続き、「Lessons from the Field: Exploring Culturally and Environmentally Relevant Solutions to Increasing Environmental Challenges of Climate and Biodiversity Loss」をテーマにまくどなど教授による基調講演が行われました。日本国内の沿岸漁業の実態調査の成果を紹介しつつ、環境問題改善のアプローチを論じる同教授の講演に出席者は感銘を受け、「カリブ地域でも同様の問題に直面しており、良い刺激を受けた」等のコメントがあり、沿岸漁業と環境保全の連関性等に関し、活発な意見交換が行われました。



【左から：APIC 島内評議員、あん・まくどなど教授、CERMES キャッシュマン所長、品田在バルバドス大使】



【現地のニュース番組収録の様子】



【右から三番目が高橋光輝准教授】



— 感じ、学び、考え、発信する —

日本文化を知る

記者団は京都を訪れ、日本の伝統文化について学びを深めようと神社仏閣を訪れるのみでなく、自らが着物を身にまとい茶道の体験をしました。一つ一つの動作が持つおもてなしの心に感銘を受け涙を流す参加者もいました。京都では、京都の街ならではの防災への取り組みについても学びを深めました。



震災を知る

宮城県を訪れた記者団一行は、東松島市長との面会ののち東松島市の震災伝承記念館を訪れ、今もなお残る震災の爪痕を目にしました。仙台市では七郷小学校を視察したのち、河北新報社を訪れ防災教育室長の武田真一氏と議論を深めました。

【河北新報社 武田真一氏と記者団一行】

発信する

参加した記者たちは日々の取材をもとに原稿を書き、それぞれの国のメディアを通じて日本での学びを世界に発信しました。

'Leave or die'
A devastated Japanese town fights back

FOR RESIDENTS of Higashimatsushima in Japan, there was no question of whether to leave their homes in areas that were vulnerable to natural disasters.

Given the relative speed and unpredictability of an earthquake or tsunami, it was even more crucial to have a clear plan to get out and get out fast.

The town's mayor Iwao Atsumi said residents were simply presented with the position: "if you want to live, you leave, if you want to die, you stay". There is no room for negotiation.

"When the tsunami hits, the people have no option but to run away (to higher ground)," said Atsumi.

By the time the March 2011 tsunami hit, of the town's 43,132 residents, more than 15,000 considered in need of evacuation had already headed to 106 shelters in safe areas.

STRICT INSTRUCTIONS
He said that the plan included strict instructions which were given to the residents and reinforced in drill by a team of community volunteers.

Municipal leaders cannot force a person to disclose his

building homes under an arrangement where (for) the first 30 years the land is provided to the people rent free," said Atsumi.

Five persons who could afford to build their own house, for example, seniors, they are provided with housing at a special rate of roughly JPY\$1.169 (10,000 yen) per month.

A new elementary school in the relocation area opened its doors in January 2016, while 1,001 residential apartment houses have already been completed and delivered.

Atsumi said that while they could not have imagined the scope of the earthquake and tsunami, they had learnt from previous disasters, especially a massive 1995 earthquake, which devastated parts of the city of Kobe.

"Once in every 35 to 40 years we expect something, so we are prepared for that, but this disaster was a one in 600-800 year event, so we were not prepared against the enormity of it," said Atsumi.

THE TOWN PLAN
Pulling on that experience, the town crafted its own plan, large sorting areas - roughly the size

Japan Meteorological Agency headquarters in Tokyo is the heart and soul of the country's weather system and disaster management.

Preparing for THE INEVITABLE

PHOTOS BY AMITABH SHARMA

【ジャマイカの新聞社「The Gleaner」から参加したアレン氏が執筆した記事】



【手前左から：FPCJ 赤阪清隆理事長、APIC 佐藤嘉恭理事長、フロイド・タケウチ氏。奥左から：FPCJ 深澤氏、記者団のケレスマ氏、モエタラ氏、アレン氏、ナス氏、アレックス氏、サミュエル氏、APIC 荒木恵理事・事務局長】

10月

太平洋・カリブ記者招聘計画2017

2017年10月16日〜26日までの間、公益財団法人フォーリン・プレスセンター(以下「FPCJ」と)の協力で「太平洋・カリブ記者招聘計画2017」を実施し、太平洋島嶼国(フィジー、サモア、アメリカ領サモア)とカリブ地域(グレナダ、バルバドス、ジャマイカ)から計6名のジャーナリストを招待しました。

今回参加したのは、ラチュナ・ナス氏(フィジー)、タリイラギ・ケレスマ氏(サモア)、クリスティン・モエタラ氏(アメリカ領サモア)、アニシャ・サミュエル氏(グレナダ)、バリー・アレックス氏(バルバドス)、グレンダ・アレン氏(ジャマイカ)の6名です。太平洋やカリブ地域の国々が共通して抱える課題「環境と防災」をテーマにし、記者団は9日間のプログラムで日本国内の視察を行いました。昨年と同様に、ハワイを中心に活躍しているライター/フォトグラファーのフロイド・タケウチ氏が、コーディネーターとして全日程に同行しました。

プログラム3日目の夜にはAPIC主催の記念夕食会が開かれ、APIC佐藤嘉恭理事長は「日本での滞在を楽しむと共に、日本の現状を伝えるために視察を充実させてほしい」と述べました。計9日間の取材プログラムのうち、東京では外務省やJICAなどの取材で日本と各国との協力関係について理解を深めたほか、川崎市ゴミ集積所や東京消防庁本所防災館などを視察し、環境や防災分野に関する日本での取り組みを視察しました。地方取材では京都府と宮城県を訪問しました。京都では日本の伝統文化についてのみでなく、長屋が並ぶ

京都特有の家屋でどのように防災対策を行っているのか理解を深めました。宮城県松島町を訪れたジャーナリスト達は、瑞巖寺の文化財保護の取り組みや「国宝瑞巖寺の大修理(2008年〜2018年予定)」の最中に発生した東日本大震災を受けて、現在どのように耐震補強を行っているのかに関心を寄せていました。続いて、100人の死者を生み出した東松島市を訪問し、市長へのインタビューや実際に津波が襲った野蒜海岸などを視察しました。仙台市では、防災教育に力学的に取り組み七郷小学校を視察した後、河北新報社を訪問し、防災・教育室長の武田真一氏の講義を受けたり、防災を巡る報道に関して議論を深めたりしました。参加ジャーナリストは日々の視察後に滞在先でミーティングを行い、視察内容について議論を深めたうえで毎日それぞれ記事を執筆しました。防災や環境分野で先進的な取り組みを行う日本での視察を自国に反映させたいと考えており、執筆された記事は各国の所属メディア機関を通してリリースされています。参加者記者の一人サミュエル氏(グレナダ: The Grenadian Voice)は、「日本はグレナダと同種の問題を抱えているが遥に先進的な取り組みをしている」と述べ、リサイクルを優先的に取り組むグレナダに「日本の技術を活かして成功させたい」と先を見据えました。多くの発見や学びのあった「太平洋・カリブ記者招聘計画2017」。環境・防災をテーマにした本計画は、太平洋・カリブ地域における国際協力活動の一環として来年も開催される予定です。(文責:大高)



MCT との協力により 大学院生受け入れ開始

この秋から、APICとミクロネシア自然保護基金 (Micronesia Conservation Trust (MCT)) との連携協定に基づき、バーサ・レイユさんとブラッドフォード・モリさんの2名が上智大学大学院地球環境学研究科への留学を開始しました。2名にプロジェクトへの参加のきっかけと、留学の目標について聞きました。【聞き手：APIC インターン生 太田】

◆ **環境学に興味を持ったのはなぜですか。**
 ブラッドフォードさん…高校3年の時に行った環境マネジメントのプロジェクトがきっかけです。世界には、毎日新しい問題・課題が浮上しています。世界がどのようにこれらの問題に対処しているのか、また、そのような対処法を母国であるミクロネシアの島々と照らし合わせ考えていくことに興味を持ちました。学士を修了した後すぐに、フィールドに出て働き始めました。その時はじめて、私たちがいかに美しく、そして繊細な土地で暮らしているかを肌で学び、限られたこれらの土地を保護することが私の使命だと感じました。さらに、高等教育を受けることで将来の選択肢の幅が広がることを願っています。

◆ **プログラムをどのように活かしていきたいとお考えですか。**
 ブラッドフォードさん…私たちは汚染・気候変化・資源の使い過ぎ等の深刻な環境問題に直面しています。このような問題に、人々は柔軟に対応していく事が大切です。つまり、働き方や生活の仕方を見直す必要があります。従って、環境問題に対する教育はもろろんですが、環境の変化を和らげるために我々も環境に優しいライフスタイルを模索していく事が重要です。私の目標は、このような難題に対して早めに準備をし、革新的・効果的な解決方法を見つけ出し、社会にポジティブな変化をもたらしことです。



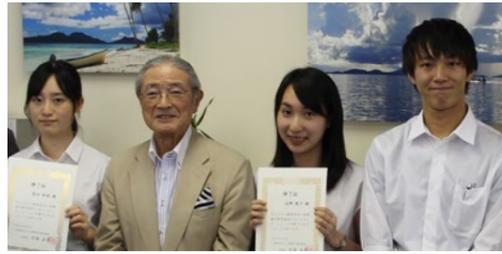
■ ブラッドフォード・モリ さん
Bradford Mori

ミクロネシア連邦チューク州出身。チューク州の環境保護庁で技術協力プログラムのマネージャーを10年間務める。ミクロネシア連邦ツアーのクライメイトチャレンジにも携わる。



■ バーサ・レイユ さん
Bertha Reyuw

ミクロネシア連邦ヤップ州出身。ミクロネシア大学経済学部を2011年に卒業。オーストラリアンエイドの支援を受けて、南太平洋大学で芸術と環境学の学士を取得。



2017年8月1日～9月15日にかけて、上智大学インターンシップ科目の就業体験として、3名のインターン学生を受け入れました。

上智大学生 APIC インターンシップを体験

上智大学インターンシップ科目は、夏期及び春期の授業休業期間中に約一ヶ月の就業体験を行い、併せて事前事後講義への出席や課題提出を行うことで単位が付与される、上智大学の正式な授業科目のひとつです。

APICは、40近くある本インターンシップ科目の就業実習受け入れ先のひとつとして、2016年2月より毎回2～3名の学生を受け入れてきました。APICでのインターンシップでは、電話対応や文書作成などの一般的な業務はもちろんのこと、外務省幹部などを講師に招いて行う講演会の運営や外国からの要人招待の際のアテンド補助など、様々な業務を体験します。
 (文責：東海林)

今回、APICのインターンシップを通して国際協力の現状について学ぶことが出来ました。日々の業務を通して、国際協力の実践の場を学ぶ機会を得、大学にいないだけでは学ぶことの出来ない、実践の積み重ねを経験することができました。これまで「国際協力」というと、大きく抽象的な概念で、具体的なイメージがありませんでした。しかし、国際協力のプログラムやそれに携わる方々と関わっていく中で、太平洋島嶼国やカリブ海地域と日本がどのような協力をしているのかを知り、国際協力のあるべき姿について考えるよい機会を得たと実感しました。特に、「太平洋島嶼国リーダー招聘計画」に携われたことは忘れがたい経験となりました。

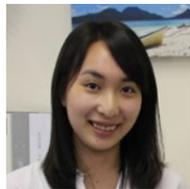
私は昨年の夏休みにAPICと上智大学が提携して開催した「ミクロネシア異文化体験ツアー」に参加させていただき、今回はインターン生としてAPICの活動に参加させていただきました。大学の講義では国際協力の仕組みや理論について学びましたが、APICでは国際協力の実践を体験させていただき、ミクロネシア連邦の政府関係者とも接することができるとよい機会となりました。



上智大学 法学部2年
島田 紗弥 さん

インターン期間中、印象に残った仕事として挙げられるのは、毎日取り組み続けたニュースレターの作成です。そもそも太平洋島嶼国・カリブ海地域のどちらも馴染みのない地域であるため、文章に出でくる固有名詞を理解しきれず困惑することが多かったことがあります。しかし徐々に慣れていくにつれ、記事を読むスピードも上がり、自分の英語力が大きく改善されるのを感じました。

他にも、ジャマイカ政府宛の書類作成をするなど、国際協力の現場ならではの経験が多くありました。普段自分が一端をなしている業務がどのように全体に繋がっているのかイメージすることができたのも、貴重な経験でした。今回のインターンでのAPIC関係者との関わりを通して、国際機関で働きたいという思いがより一層強くなりました。



上智大学 文学部3年
大野 敦子 さん

今回のインターンシップで学んだことを今後活かしていきたいです。



上智大学 経済学部3年
中村 誓人 さん

太平洋・リーダー招聘計画

ミクロネシア連邦ウルセマル連邦議員(元大統領)招聘

2017年11月27日〜12月2日にかけて、APIC太平洋リーダー招聘計画の一環として、ミクロネシア連邦よりウルセマル連邦議員(元大統領)を日本に招待しました。訪日期間中に、ザビエル留学生のための奨学金に多大なご寄付をいただいた坂本光彦氏に対する、ミクロネシア連邦議会の感謝決議手交式が併せて開催されました。

◆東京都内での視察

日本滞在中の前半は東京都内での視察として、ウルセマル議員は外務省訪問、日本・太平洋島嶼国友好議員連盟訪問、上智大学訪問、テンプル大学学長とも面会を行いました。外務省では、フリッツ在京ミクロネシア大使とともに、堀井巖外務大臣政務官と面会しました。日本・太平洋島嶼国友好議員連盟を訪問した際は、同連盟会長を務める古屋圭司衆議院議員他3名の議員と懇談し、活発な意見交換が行われました。

上智大学では、APIC佐藤昭治常務理事(上智大学グローバル教育センター客員教授)の案内で、四谷キャンパスの中央図書館を視察した後、同キャンパス内のクルトウルハイム聖堂(イエズス会神父が共同生活をしている修道院SJハウスに併設されている聖堂)を上智大学名誉教授のドナル・ドイル

神父の案内で視察しました。ウルセマル議員は、「このような素晴らしいキャンパスに、ザビエル留学制度でミクロネシアから留学生を送ることができ、嬉しく思う」と感想を述べました。

その後、ウルセマル議員は、テンプル大学ストローク・ブルース学長と、昭和女子大学にて(昭和女子大キャンパス内の新校舎をテンプル大学と共有する計画があるため)面会し、ミクロネシアからの学生派遣について意見交換を行いました。

◆坂本光彦氏への感謝決議手交式

ミクロネシア連邦議会は、ザビエル奨学金に多大な寄付を行った坂本光彦氏に対して、2016年に正式な感謝決議を採択しましたが、この度、ウルセマル議員の来日に際し、11月29日夜、東京倶楽部にて、APIC佐藤嘉恭理事長主催の歓迎夕食会の中で感謝決議の手交式が行われました。

手交式では、ウルセマル議員が坂本光彦氏に対する感謝の言葉を述べ、木製の額に入れた感謝決議を坂本光彦氏に手渡すと、関係者70名以上が集まった会場は、大きな拍手に包まれました。その後、坂本光彦氏が謝辞を述べ、今年の9月に来日したザビエル留学生より花束が贈呈されました。坂本光彦氏は謝辞の中で、「ロータリークラブのメンバーとしてミ



【日本・太平洋島嶼国友好議員連盟との意見交換会にて。左から：山際大志郎 衆議院議員、伊東良孝 衆議院議員、三原朝彦 衆議院議員、古屋圭司 衆議院議員(議連会長)、ウルセマル連邦議員、フリッツ駐日ミクロネシア大使、アリク・ジャクソン 国会法律顧問、APIC 佐藤嘉恭理事長、APIC 荒木恵理事・事務局長】

クロネシアに海水蒸留器を寄贈する活動をしてきたが、ミクロネシアの更なる発展のためには高度な教育が必要不可欠であるとの考えに基づいて、ザビエル奨学金制度に協力することにした」と、寄付に至った経緯を述べました。また、「ザビエル奨学金の更なる発展のために皆様のサポートが必要」と、出席者に寄付の呼びかけをし、「ご挨拶を締めくくりました。手交式には5名のザビエル留学生の他、9月のエクスポートツアーに参加した上智大学及び上智大学短期大学の学生15名も出席しました。学生たちはツアー中にミクロネシア連邦議会を訪問した際に、連邦議会の開会式にて、ウルセマル議員からひとりずつ名前を呼ばれて紹介を受けており、手交式の後の歓談の時間にはウルセマル議員のもとに集まって、その時の御礼をしていました。

閉会に際して、上智学院の高祖敏明理事長は、「大変喜ばしいことに、来年9月にはザビエル留学生から最初の上智大学卒業生が誕生する。坂本様には深く感謝をしたい」と、改めて坂本光彦氏に対する感謝を述べ、大変和やかな雰囲気の中に、夕食会は終了しました。

◆地方視察

滞在日程の後半は、地方視察として、京都の金閣寺及び大阪の国立民族学博物館を、ナンマル遺跡研究の第一人者である片岡修博士(上智大学客員教授)の案内により、視察しました。

国立民族学博物館には、1975年に沖縄で開催された国際海洋博に出席するため、ミクロネシア連

邦ヤップ州のサタワル島から沖縄まで航海したカヌー「チエエメニ号」が展示されていますが、サタワル島はウルセマル議員の奥様のご出身地ということもあり、非常に喜んでいました。また、チエエメニ号の航海を記録したドキュメント映像を視聴した際には、懐かしさに感激する場面もありました。

ウルセマル議員は今回の訪日について、「素晴らしい日程が組まれており、大変有意義だった。あたたかく迎えられたことが大変嬉しかった」と感想を述べています。ミクロネシアと日本の友好関係の増進に寄与で出来たと思います。

なお、ウルセマル連邦議員は12月7日の連邦議会臨時会開会式において、とくに発言を求め、今回の訪日につき詳細に報告を行いました。(文責：東海林)

滞在中のスケジュール

11/27 (月)	来日、APICによるブリーフィング
11/28 (火)	堀井巖外務大臣政務官 表敬、日本・太平洋島嶼国友好議員連盟 古屋会長と面会
11/29 (水)	上智大学訪問、明治記念館 視察 テンプル大学訪問 APIC 主催歓迎夕食会及び坂本光彦氏への感謝決議手交式
11/30 (木)	京都へ移動、金閣寺 視察
12/1 (金)	大阪へ移動、民族学博物館 視察
12/2 (土)	離日



【「チエエメニ号」とウルセマル連邦議員】



【上：坂本光彦氏への感謝決議手交式にて。上智大学生及び関係者、ザビエル留学生たちと】



【下：感謝決議を渡すウルセマル連邦議員(左)と坂本光彦氏(右)】

第4期ザビエル留学生

新入生2名入学

2017年9月21日に上智大学で2017年度秋学期入学式が開かれ、ザビエル留学生第4期生のショーン・ミンギー (Shaun Mingyi) さんと、リアナ・プレストン・アイロズ (Tiana Preston-Irons) さんが出席しました。

APICと上智大学、ザビエル高校の3者による連携協定(MOU)に基づき、2014年に「上智大学・APICザビエル高校留学生奨学金」が創設されました。同大学では既に第1期生のメアリー・ヘレンさん、第2期生のリサ・オウエさん、第3期生のニコ・ロンキリオさんの3名がザビエル留学生として勉強に勤しんでいます。今秋の新たな2名を加え、2017年秋からは計5名の留学生在が上智大学で学びを深めることとなります。

学生たちは早速様々なイベントに出席し、日本人学生と交流する様子が見受けられました。日本での生活が充実したものになるよう引き続き支援してまいります。(文責：加藤)

ザビエル高校

ザビエル高校は1952年、ミクロネシア連邦チューク州ウエノ島にイエズス会によって設立されました。4年制の男女共学で、生徒の数は約1500名です。北太平洋地域で最も著名な高校で、ミクロネシア連邦のみならず、パラオ共和国、マーシャル諸島共和国などからも生徒が集います。生徒の学業水準はこの地域において最高水準であり、アメリカで最も競争率の激しい奨学金の一つである、「ビル・ゲイツ奨学金」受給者を多く出していました。過去の卒業生には、モリ前ミクロネシア連邦大統領をはじめ、この地域の政界・経済界のリーダーを輩出しています。



ザビエル留学生

オクトーバーフェストに参加

2017年10月6日、東京南口ロータリークラブのご招待により、上智大学で学んでいるザビエル留学生5名が同クラブ主催のオクトーバーフェストに参加しました。

オクトーバーフェストに招待されたのは、ザビエル留学生第1期生のメアリーさん、第2期生のリサさん、第3期生のニコさん、そして、今年9月



に来日して上智大学に入学した第4期生リアナさんとショーンさんの5名です。留学生たちは、APIC佐藤嘉恭理事長と、ザビエル留学生のサポートをしてくださっている三溝真季さん(上智大学ソフィア会常任委員)と共に参加し、ロータリークラブのメンバーの方や他の国・地域からの留学生との会合を楽しみました。(文責：東海林)



佐原大祭に

ザビエル留学生在が参加

2017年10月14日、APICが支援するザビエル高校留学生在が千葉県佐原で開かれた佐原大祭で日本文化を体験し、山車曳きや振る舞い酒、焼き鳥串焼き体験などに挑戦しました。

株式会社エヌアイデー(NID)がCSR活動の一環として、上智大学で学ぶ外国人留学生在を対象に日本文化を体験してもらうという目的で招待されたもので、NID、APIC、上智大学の三者が連携して実現しました。「Sawara Experience」と題されたプロジェクトは今回が第1回目。今後継続的に開催される予定です。

今回は上智大学在学中のザビエル留学生在5名と同大学大学院在学中の2名が参加し、NID関係者およびAPIC関係者約10名が同行しました。

千葉県佐原に到着した留學生は初めに香取神宮へ参拝し、美しい色で飾られた神宮の立派な付まいに圧倒されていました。その後お祭り会場へ移動し、地元住民の方々と一緒に伝統的な山車



曳きを体験しました。留學生は見よう見まねですぐに踊りを覚え、現地の人顔負けの踊りを披露していました。さらにNIDが用意したオリジナルの法被を着て、お祭り広場のNIDブースで樽酒を現地の人々にふるまったり、焼き鳥串焼き体験をしたりしました。夕方には多くの人で混み合う中、名物である「の字廻し」を見学しました。

ユネスコ世界無形文化遺産にも登録された300年の歴史を誇るお祭りを前に、参加した留學生からは、「異なる宗教や習慣に魅了された。有名な神

宮のひとつである香取神宮でお祈りでき、素晴らしいかった。」とか、「お祭りは、今まで自分が経験したことのない貴重な日本文化体験だった。」と言った声があり、「これらの異文化体験はまさに日本に留学に来た理由そのものだった。」と今回のプロジェクトに満足した感想が寄せられました。

本事業は来年1月に太平洋・カリブからの短期留學生約20名を対象に開催される予定です。引き続き歴史の深い佐原で日本文化への理解や現地の人々との交流を深めることが期待されます。

(文責：永沼)



— 幹事メンバーからのコメント —

2015年上智大学共催のミクロネシア異文化ツアーに参加したことがAPICとの関わりのはじめです。実際にミクロネシアに行き、現地の人・文化・人柄に触れ、自分のライフスタイル・生き方・価値観を見直すきっかけになりました。この貴重な経験を活かして、日本でも異文化交流等の共通する興味を持った学生とともに繋がる・プロジェクトを実行する場とし良い機会だと思いAPIC学生会に参加しました。APICと関係のある麗澤大学等との連携プログラムなどもこれから始めたいと思っています。

APICにはこれまでにミクロネシア・エクスポージャーツアーに参加させていただいたのはじめとして、サモア通信大臣を招待する夕食会のスタッフや、ミクロネシアからの留学生のホームステイ受け入れなどと、大変貴重な経験をさせていただきました。今回の学生会発足にあたり、太平洋・カリブ地域との交流をより発展させられるよう学生らしく積極的に活動に参加するとともに、この地域への関心を持つ学生の輪を広げていければと考えています。



上智大学
外国語学部4年
太田 あおば さん



上智大学
総合グローバル学部2年
塚本 遼 さん



上智大学
総合人間科学部4年
金原 弘恭 さん



上智大学
総合グローバル学部1年
永沼 弥生 さん

私は2015年の夏季休業中にミクロネシアツアーに参加して以来、APICの事業に学生ボランティア、そして学生インターンとしてかわらせていただきました。このたび有志の学生が50人以上も集まり、学生会が発足いたしました。主にAPICが企画するイベントや留学生のサポートが目的となるこの会ですが、メンバー一人ひとりがしっかりとした目的意識と責任感を持って活動してまいります。学生だからこぞできる仕事をして、イベントを盛り上げていきたいとおもいます。

2017年度ミクロネシア・エクスポージャーツアーに参加し、以来APIC事務所に長期でインターンをさせていただいています。始めてから2カ月が経ちますが、たくさんの方々に出会い、かけがえのない体験をさせていただいています。未熟者ですが、これから学生会幹事として、インターン生として、様々なことにに関わり、チャレンジしていきたいです。大学1年でこのような素晴らしいチャンスをいただけたことを心から感謝します。

APIC 学生会



発足

2017年10月、上智大学ミクロネシア・エクスポージャーツアーやAPICインターンシッププログラムに参加した学生を中心に、APIC学生会が新たに発足しました。

APIC学生会は、エクスポージャーツアーやAPICでのインターンを通じて国際協力に関心を持った学生たちに、引き続き国際協力やミクロネシア地域をはじめとした諸外国と関わりを持ち続けるための場を提供し、そこでの活動を通して国際協力のための能力を付加する、という考えのもと発足されました。中心的な役割を担う幹事学生12名を含む合計52名で構成されており、積極的かつ自主的な活動を行う学生主体の団体です。

「国際協力に資する人材育成」に対する支援を主な事業のひとつとして掲げているAPICの協力を受け、APIC早期国際情勢講演会や太平洋及びカリブのリーダー招待計画、学生招待計画などに参加させていただいています。これからも様々な活動をしていきますので、どうぞ応援をよろしくお願います。(文責：太田)

APIC学生会の目的

- 1. 学生が国際協力に関心を持つて育つこと
- 2. 具体的な国際協力プログラムに参加すること

これにより...

- 1. APICの国際協力プログラムに参加した学生が、将来的にもつながる人的ネットワークを構築すること
- 2. 国際協力のための能力付加(エンパワーメント)の支援をすること



【APIC主催夕食会にて英語でスピーチの代読をする学生会メンバー】



略 歴	
1959-60 年	カリフォルニア大学バークレー校産業関係研究所所長助手
1960-61 年	日本能率協会エコノミスト
1961-98 年	成蹊大学政治経済学部専任講師、助教授、経済学部教授、経済・経営研究科教授
1990-2011 年	政策研究大学院大学（前埼玉大学大学院）客員教授
1998 年 - 現在	成蹊大学 名誉教授
1999-2003 年	帝京大学大学院国際文化研究科教授

闘精神が、僕の人生における対途上国協力に限らず、あらゆる国際協力推進の原理原則への執着の原点となったと考えています。

Q2・評議員として、APICの活動についてどうお考えですか。

APICは、その名称が示すように、我が国の国際協力を推進するための団体です。しかし、今日の国際協力は、APIC設立当時からすると、その課題と活動分野は一層広がっている一方、他方我が国がおかれた地位や国内事情にも大きな変化があり、さらに、中国、インドといったような新興国も、その固有な理由から国際協力活動を拡大しています。このような国内外環境やニーズの大きな変化の中で、日本の国際協力政策も変貌しており、その活動の方向、規模、分野、地域、手段等も、当然20年、10年前から変わってきています。そこで、APICの国際協力活動も、その優先順位に変化が起きて来るのは当然でありまず。気候変動や環境問題は、途上国の貧困問題、人権問題と並んで、今や深刻な地球の課題です。南太平洋やカリブ海に浮かぶ小島嶼国にとっては死活問題であり、APICが近年この分野での協力活動を強化し

Interview

成蹊大学名誉教授
廣野良吉 APIC評議員

本会報誌では、APICの活動を支える理事・評議員へのインタビューを行っております。第5回となる「APIC役員に聞く」では、廣野良吉氏（成蹊大学名誉教授）にインタビューをお願いし、ご自身の経験に基づいた国際協力への見解と、若い世代へのメッセージについてお聞きしました。【聞き手：APICインターン生 川上、太刀川（津田塾大学）】

Q1・廣野先生は国連や外務省などで活躍されてきたと伺いましたが、そのような国際機関の職業に就こうと思われたきっかけは何ですか。

きっかけは、お誘いを頂いたことでした。それを引き受けた理由は、第二次世界大戦直後から国際開発問題に関心を寄せていたからです。日本自身が、諸外国や国連、世界銀行からいろいろな支援を受けて戦後の復興を果たしました。それを受けて自分のできることは何かと言うと、恩返しという形で途上国に対して同じ様なことをやる

ていることを高く評価しています。さらに、APICは今後も、その活動基本である国際協力への日本国民各層、企業の理解の増進を図って欲しいと思います。その意味で、今まで通り素晴らしい、有意義な早朝講演会や国際懇話会を続けると同時に、新しい枠組みとして若者との意見交換のプラットフォームを常設することが重要ではないかと思えます。若者も、目の就活やアニメだけでなく、世界に目を大きく開いて、環境や貧困、難民、安全保障など、地球社会が抱えている主要な問題に共に向き合うことが重要であり、大学の先生や政治家などの少し年代の上の人々とも話し合う、そういう場があったらと思います。若者には、世界が抱える課題に対する考え方をしっかり持って、将来を担う責任ある地球市民として、APICのプラットフォームを使って積極的に提言してほしいですね。

Q3・国際協力に多く携わってこられたなかで、国際協力において大切なことは何だとお考えですか。

国際協力について大切なことは主に3つあります。1つは多様性を認め、尊重するということです。人間の社会は、人種、宗

ことだと思いい、主に国際開発の場で働くことを決めました。国際開発の現場も様々です。大学で教えたり、論文を書いたり、あるいは国際会議に出たり。それらも重要だけど、国際機関はやはり影響力がある。そこでの議論が直接影響力を持つわけです。自分の考えを率直に皆さん方に示すことができるし、同時にそこから学ぶことができる。国際協力の問題に関して深い関心を持って取り組んできたということです。

また、戦後間もない頃みた米国映画「わが谷は緑なりき」からの衝撃的な印象が、僕の人生における環境問題への取り組みの出発点でありました。同じ時期にみたフランス映画「格子なき牢獄」から受けた自由・平等・同胞愛・反ナチズム・平和への強かな信念に基づく徹底的な抵抗と、それを可能にする緻密な戦略・計画づくりが、僕の人生における自由・平等・民主・平和主義への出発点であったといえるでしょう。さらに、戦後占領期における経済復興、民主化への米国の絶大な支援とその支援に真正面から応えた日本人の勤勉さ、自立心、敢

教、文化的に多様ですが、樹木、動物など自然も多様で、やはり地球上のすべての生物とその化石化した鉱物も非常に多様ですよ。国際協力はまさに多様性の上に存在するものであって、一方的に他の人々や国々に思想や制度を押し付けることではありません。相手は自分と違うんだということとを十分に理解した上で、お互いに協力し合って、平和で希望に満ちた「持続可能で包摂的かつ公正な国際社会」を共に築き上げていくことが大切ではないでしょうか。富士山へ登頂するという目標は同じであつても、上る道は多々あります。

2番目は、多様性をお互いに認め合ったうえで、国際社会の共通な目標、例えば2030年の国際的なアジェンダとして国連が採択した「持続可能な開発目標（SDGs）2016・30」の達成に向けて、それぞれ各人、各主体、各地域社会、各国がもっている経済・技術的、社会的、文化的な資源・資産を十分に活用するという、自立精神、自助努力が不可欠です。自助努力なき国際協力には「持続可能性」はありません。自助、共助、公助こそ、国際協力の基本的原理・原則といつてよいでしょう。そこでは、平和で希望に満ちた「持続可能で包摂的かつ公正な国際社会」を共に築くために合意した不可欠な国際的ルール

を厳守することが求められます。これらの国際的ルールの各人、各主体への周知徹底は、各加盟・批准国に課せられた責務であり、そのルールの違約は国際協力の否定を意味します。



【インタビュー中の様子】

そして3番目は自分の国のことを良く知り、自分なりの考えをもち、相手に正しく伝えることです。外国の人々が私たち日本人に何を期待するかというと、それぞれの関心分野について日本の過去、現状、将来計画について知りたいんです。日本のことについて十分なし適切な程度知らずに国際協力云々なんて言っても意味ありません。国際協力に従事しないし関わる日本人は、日本の歴史、経済、社会、政治、文化、伝統など、色んなことを勉強する必要があります。読書による知識、新聞などマスコミ情報は勿論大切ですが、何よりも自らの体験を通じた自分の考えを持ち、それを正しく伝えることが不可欠です。そういう意味で、日本のことを学習し、それを正しく伝えていくコミュニケーション能力・意欲が大切だと思います。

Q4・環境問題も含めたSDGs（持続可能な開発目標）が新たに2015年に策定されましたが、この新たな目標を達成するには何が必要だとお考えですか。

SDGsの達成のためには3つの重要な点に注目する必要があります。まず第一に、世界の国々はこれまでも、直面するもろもろの共通課題に取り組んできました

権、教育、環境、自然災害などいかなる問題を見ても、最大の被害者は貧困層です。今までは「国」単位で考えられていましたが、SDGsでは社会的弱者と呼ばれる人々の被害の最小化に注目しています。そのためには、総ての国々で、政府、地方自治体、民間企業、市民団体などあらゆる主体の相互理解と協力が不可欠です。同時に、あらゆる国々の協力・パートナーシップ（SDG第17目標）が不可欠です。日本でも、そのような方向で各主体の協力関係が始まっていますが、もっともっと社会の底辺で生活している人々への支援に力を入れることが重要です。

3番目は、SDGsに先行して国連で採択され、国際社会がその達成に協力してきた「新世紀開発目標（MDGs）2005-15」が主に途上国が直面している課題を中心としてきましたが、SDGsでは先進諸国でも直面している課題の解決にも取り組んでいます。という特徴を持っています。子供の貧困問題や若者の雇用問題、所得・地域間格差や財政赤字の拡大といった、かつて途上国の問題と言われたことが、1980年代以来の世界経済のグローバル化の中で、先進国でも益々深刻になってきています。さらに2015年秋のパリ条約締結でも明白のように、気候変動によ

Q5・これからの未来を担う若者に一言お願いします。

僕が若者に期待するのは、「目を世界へ開き、未知のものに挑戦せよ！」ということとです。札幌農学校を創立した彼が、「Boys, Be ambitious!」という激励句を残しました。「意志あれば、路あり（Where there is a Will, there is a Way）」を信じて、いかなる困難に直面しても、諦めてはなりません。世界へ目を開いて居住地域やわが国の課題の解決に「Better Late than Never」の精神で、真剣に取り組んでほしい。正に「Think globally, act locally」です。そして、海外へ飛躍し、日本在住の

る海面の上昇、氷河の溶融や自然災害の頻発化・大型化は、先進国・途上国を問わず、今や全世界の人々が直面する深刻な問題になっていきますね。この点でやはり、国家間だけではなく、それぞれの国内でも各主体内、主体間でお互いがパートナーシップを組むことが不可欠です。そして地球市民全てにとつて安全・安心・公正な平和社会の構築、あらゆる生物にとつて持続可能な「碧い地球」の復元・維持のために、最大の国内・国際協力を推進していくことが真剣に問われています。

が、そこで分かったことは、それぞれの国で解決すべき問題の優先順位が違うがために、各国間の協力体制が必ずしもうまく機能してこなかったといっているでしょう。SDGsという世界の共通課題を合意・設定したからには、その課題解決にあたっては、各国が有する経済技術的、社会的、環境的、文化的条件・特質が異なることに注目して、その比較優位に基づいてWin-Win協力体制を、二国間、地域間、世界的に構築することが重要です。そのためには、先ず近隣諸国間で、それぞれの比較優位に基づいた経済・技術・社会・環境・文化協力などを推進することが望ましく、ASEAN経済・社会協力協定は、正にその典型です。欧州連合（EU）も北米自由貿易協定（NAFTA）、南米自由貿易連合（Mercosur）も同様です。しかしSDGs達成のためには、トランプ大統領の提唱する「America First」や、近年台頭しつつあるEU諸国内での「自国ファースト」思想への連鎖反応はくい止め、国際協力を推進することが急務です。

2番目ですが、SDGsには「Leaving no one behind.」「誰も取り残さない」という理念が根底に流れています。国のことだけでなく、一人一人個人を助けていくという非常に重要な概念です。貧困、人留学生や外国の方たちとも、我が国や世界が現在直面している多くの課題について、積極的に意見交換・提言・行動を共にして欲しい。かような学生がさらに増え、連携して行けば、2030年までにSDGsが目指す世界の実現も決して夢物語でもないと思います。



【左から：インターン生の太刀川さん、廣野良吉 APIC 評議員、インターン生の川上さん】



シリーズ第2回 ミクロネシアの巨石文化 —世界文化遺産ナンマトル遺跡を中心に—

上智大学 客員教授
片岡 修

ポーンペイ国際空港 (片岡撮影 2017)



【図1 ポーンペイ島の地図
(原図: Nan Madol nomination dossier 2015)】

ポーンペイ州の中心の島で、東カリン諸島の北緯6度54分、東経158度15分に位置しています。西方のヤップ州とチューク州、東方のコスラエ州の計4州でミクロネシア連邦を構成しており、首都はポーンペイ島のパリキールに置かれています。行政的にはショケース、ネッチ、ウー、マトレニーム、キチの5地区から成り(図1)、近隣のパキン環礁やアント環礁を含む8環礁島がポーンペイ州に属しています。

ポーンペイ島の地理と環境

ポーンペイ島の中心の島で、東カリン諸島の北緯6度54分、東経158度15分に位置しています。西方のヤップ州とチューク州、東方のコスラエ州の計4州でミクロネシア連邦を構成しており、首都はポーンペイ島のパリキールに置かれています。行政的にはショケース、ネッチ、ウー、マトレニーム、キチの5地区から成り(図1)、近隣のパキン環礁やアント環礁を含む8環礁島がポーンペイ州に属しています。

ポーンペイ島の多くはアメリカカや日本の輸人に頼っているため、人の降りだけでなく、食料や日用品が詰まった大量の荷物が降るされます。チュークからはアロハやカラフルなワンピースで着飾り、知人や家族から送られた花環を頭にかけた乗客が乗り込んでいきます。花飾りのプエルメリアの甘い香りが、機内に漂ってきまう瞬間です。

ポーンペイ島は、グアム島とパラオ共和国のバベルダオブ島に次いでミクロネシアで三番目に大きい火山起源の島です。最高峰のナーナラウト山は標高798mあり、北マリアナ諸島のアグリハンに次いで二番目に高く、700m級のニーンエニ山など標高600mを超える山が11ヶ所あります。地質的には、日本海溝やマリアナ海溝が形成されているプレートの境界でもある安山岩線のはるか東に位置しています。そのためポーンペイ島は玄武岩でできた島で、その最大径は23kmで面積334.2km²の五角形をしています。地形をみると、山地(81%)とマングローブ湿地(14%)が95%を占め、平坦地はわずか5%しかありません (Faird 1982)。

20ヶ所の水路を持つバリアリーフと広大なラグーンが、チェムエン島周辺を除きほぼ全島を包囲しています。内陸部は密集したジャングルと凹凸の激しい山地で特徴づけられ、ナーナラウト山から北流するカマル川、東流するセニペーン川、南西流するレーンメシ川など大小42本の河川が沿岸のリーフに流れ込んでいます。気温は年平均27℃で、湿度は年平均85%の高温多湿の島です。年降水量が4,875mmの熱帯多雨林気候で特徴づけられ、12月から5月は北東あるいは東貿易風が卓越しています (NOAA 1990)。内陸部では年間降雨日が300日以上ということなので、ほぼ毎日雨が降る計算になります。また、内陸部

の一年の降雨量は少なくとも7,500mm以上に達するということです (Fairbert 1982)。1981年から2010年の30年間の東京の年平均降水量は1,528.8mm (気象庁 2011) ですから、ポーンペイ島の降雨量の多さは一目瞭然です。豊かな水のおかげで肥沃な土地に恵まれ、島のあちこちで赤や白や黄色の花が咲き誇っています。ポーンペイ島が「ミクロネシアの花園」というニックネームを持っている所以です。

空港のあるチャカチック島と本島は堤防で繋がっています。堤防を抜けると経済の中心地として繁栄してきた街です。空港から堤防を通り抜けると道路は直進路と右側の坂道に分岐しています。そのまま真っ直ぐ海岸に沿った道路は「海岸通り」、右方へ緩やかな坂道を進むとコロニアのメインストリートの「ナミキ通り」につながり、今もその日本名が残っています。コロニアを貫くこれら2本の幹線道路周辺には、統治の歴史を彷彿とさせる建物跡や記念碑がたくさん残っています。

たとえば、坂道を登り切ったところにスペイン時代の砦跡があります(写真3)。今は球場として整備され、野球だけでなく

ポーンペイ島へのアクセス
いよいよナンマトル遺跡のあるミクロネシア連邦のポーンペイ島に出发です。残念ながら、ポーンペイ島へは日本から直行便がないので、グアム経由で行くことになり。日曜日以外は現在のところ乗り継ぎ便がないので、平日はグアムで1泊することになります。グアムからポーンペイ島まで南東方向に2時間20分の飛行ですが、途中チュークに寄航します。
チューク島は長径63kmで周囲約212kmに及ぶ世界最大級のバリアリーフに囲まれた火山島で、広大なラグーンに19の島々 (Cala 1990) が顔をのぞかせています。外洋のネイビープール、サンゴでできたバリアリーフのホワイト、静かなラグーンのエメラルドグリーン、島々の木々のダークグリーンをまばゆいばかりの色彩コントラストは、「美しい」という一つの言葉では表現できないほどの美しさです。チューク州の州都があるウエノ島麓の国際空港は、委任統治時代に日本が建設したものです。成田空港や関西空港の滑走路は全長4,000mあるそうだから、チューク島の1,140mの滑走路への着陸は少々緊張させられるかも知れません。
バリアリーフに囲まれているラグーンは外洋の波の影響を受けにくいので、チューク島は第二次世界大戦時には日本海軍の一大基地となりました。1944年にアメリカ



【写真1 パキン環礁 (片岡撮影 2005 民博所蔵)】

カルの総攻撃を受け、ラグーンに停泊していた50隻以上の艦艇と多数の戦闘機 (Caley 2000) が美しい湖底に沈められてしまいました。
ミクロネシアの島々の多くはアメリカカや日本からの輸人に頼っているため、人の降りだけでなく、食料や日用品が詰まった大量の荷物が降るされます。チュークからはアロハやカラフルなワンピースで着飾り、知人や家族から送られた花環を頭にかけた乗客が乗り込んでいきます。花飾りのプエルメリアの甘い香りが、機内に漂ってきまう瞬間です。



【写真2 ショケース・ロック (片岡撮影 2011 民博所蔵)】

フライトの楽しみは、座席の位置に大きく影響されます。左と右では全く景色が違って見えるので、筆者は島の景観を楽しむだけでなく島々を観察できるように、コースをイメージして座席を予約する瞬間です。
フライトの楽しみは、座席の位置に大きく影響されます。左と右では全く景色が違って見えるので、筆者は島の景観を楽しむだけでなく島々を観察できるように、コースをイメージして座席を予約する瞬間です。



【写真3 スペイン砦跡 (片岡撮影 2012 民博所蔵)】

子供たちの遊び場や憩いの場として利用されています。スパニッシュ・ウォールと呼ばれる。砦跡と共に見えては、砦跡の北側にはドイツ時代の教会の鐘楼跡が見えています。砦跡と共に統治時代の代表的な建物跡です。ナミキ通りに沿って歩いていると、左手にポーンペイ観光公園課の建物横のさびた日本軍の戦車が目に入ります。通りの突き当たりのボタニカル・ガーデンにはポーンペイ州政府観光局があり、その奥に廃墟と化した日本委任統治時代の農業試験場が建っています。

二つの奇妙な習慣

歩いてみると、ところどころでカウンターの売店を見かけます。のぞいてみると、棚には缶詰や洗剤や生活用品が並べられています。さながらコンビニエンス・



【写真4 売店のビートルナッツ (片岡撮影 2014 民博所蔵)】

ストアといったところでしょうか。時々たわわになった小さな緑色の木の実が軒先から吊り下げられたり(写真4)、カウンターの上のバケツに入っていたりしているのを見かけることがあります。椰子科の仲間ビンロウ(檳榔)という木の4〜5cmの種子です。チューインガムのように噛むための嗜好品で、ビンロウを噛む行為を英語名からビートルナッツ・チューインゲと呼んでいます。この習慣は、台湾を起源とするオーストロネシア語族と呼ばれる人たちが、フィリピンやインドネシアなどの東南アジア島嶼域を通過して初めて太平洋の島々に移住してきたときに、すでに携帯していたようです。シリーズ第1回でお話しした西ミクロネシアへの人の拡散ルートからも分かるように、ミクロネシアではこの習慣はマリアナ諸島やヤップ島など西部



【写真6 チェムエン島周辺 (ポーンペイ州歴史保存局)】

が起源とされ、そこから東方のポリネシアに広がったようです。ミクロネシアでは、かつてポーンペイ島の東560kmにあるコスラエ島でも飲まれていたのですが、キリスト教の布教に伴い禁止されました。その証拠として、ナンマトル遺跡に似た石積みレロ遺跡にカヴァア石が残っています。したがって、現在はミクロネシアではポーンペイ島だけで飲まれている飲み物です。ナンマトル遺跡の各所にカヴァア石が残っており、いろいろな儀式や祭宴の場でカヴァアが飲まれたのでしょう。

跡近くまで行くことができます。ただし、遺跡所有権を主張する伝統チーフや訪問する際に通り抜ける土地の所有者など、陸路で行く場合には複数の支払いが求められます。当遺跡は世界遺産と同時に「危機遺産」にも登録され、いくつかの改善点が指摘されています。その一つに、この遺跡入場料の徴収方法の問題があげられており、将来支払いの一本化を検討する必要があります。

ナンマトル遺跡は、ポーンペイ島南東のマトレニーム地区のチェムエン島の麓に築かれています(写真6)。ナンマトル遺跡に行く方法は二つあります。一つは、潮の高さによりですが、ボートで行く方法です。もう一つは陸路で行く方法ですが、公共の交通機関はないのでレンタカーかタクシーを利用することになります。人やイヌや豚による道路の混み具合によりませんが、海岸に沿って美しい景色を見ながら小一時間かかります。ポーンペイ本島とチェムエン島は堤防で繋がっており、車でナンマトル遺

2016年の夏に世界遺産に登録されましたが、現在のところ博物館やビクターセンターはなく、公式解説書も存在しません。そのため、国際協力推進協会(APIC)、東京文化財研究所の石村智さん、立命館大学の益田兼房先生、NPO法人パシフィック・ルネサンス代表の長岡拓也さんたちと一緒に、ビクターセンターを含むナンマトル遺跡の保存に関わる様々な現地政府への支援活動を展開しています。今の時点では、



【写真5 カヴァ (片岡撮影 2002 民博所蔵)】

の島々に初期段階から広がったことが、考古学的にも知られています。ポーンペイ島のビートルナッツ・チューインゲの習慣は、そんなに古くはありません。

ビンロウの固い種子を歯で半裁したものを、コショウ科のキンマという手のひらサイズの葉の上に置き、ライム(石灰の粉)を振りかけて噛みます。タバコを半分ちぎって一緒に噛む人もいます。清涼感を感じるそうです。売店では、ビンロウを1本単位でばら売りにされています。噛んでいるうちに口内に溜まってくる、種子の成分と石灰と唾液が混じった真っ赤な血のような液体を吐き出します。時々見かける道路や建物の壁や車のボディの茶色いシミはその痕跡です。長期間ビンロウをかみ続けると、ステインによりお歯黒状態の歯になってしまいます。マリアナ諸島の遺跡か

遺跡を訪問する前にコロニアの観光局で多少の資料を入手するか、前もってインターネットでナンマトル遺跡に関する情報を入手しておくことをお勧めします。

さて、いよいよナンマトル遺跡です。少し遺跡を概観してみましよう。チェムエン島の麓で水底が満潮時には浸水し、干潮時には露出する潮間帯と呼ばれる浅瀬に築かれています。それはマングローブの森を育てる環境でもあるため、ナンマトル遺跡もマングローブの木々に囲まれています。遺跡を遠くから見ると、森の塊か島の一つにしか見えません。ちなみに、遺跡保存の観点から、人工島間の水路に繁殖したマングローブの取り扱いについては、今後の改善事項の大きな課題の一つになっています。

遺跡は、約1.5×0.7kmの長方形の範囲に築かれた面積160×12、700㎡(Hambruch 1936; Ayres 1993)のおよそ100の人工島で構成されています。中には1辺が100mを超えるものがあります。満潮時に海水があふれないように1〜2mの高さにサンゴを積み上げて、その上に住居やお墓や儀式・儀礼を行う建物が建設されています。人工島と人工島の間は満潮に向けて水位が上昇すると、歩くことが困難な深さの水路が形成されます。水路に区画された壮大な景観が、ナンマトルを「太平洋のヴェニス」や「水上都市」などと賞賛せしめたのは当然のことかも知れません。

参考文献

Ayres, William S., 1993. *Nan Madol Archaeological Fieldwork*. Final Report. A Research and Historic Preservation Project 1987-1990.
 Craib, Hohn L., 1997. *Truk Archaeology: An Intensive Archaeological Survey of Pwené Village, Doublon, Truk State, Federated States of Micronesia*. Submitted to Micronesian Endowment for Historic Preservation, Federated States of Micronesia and U.S. National Park Service.
 Hambruch 1936. *Ponape. Ergebnisse der Südsee-Expedition 1908-1910* ed. by Thilenius. Hamburg: Friederichsen. DeGruyter & Co. m.b.H.
 Jeffery, William, 2007. *War Graves, Munition Dumps and Pleasure grounds: A Post-Colonial Perspective of Chuuk Lagoon's submerged World War II sites*. Ph.D. Dissertation. School of Arts, Education and Social Sciences, James Cook University.
 気象庁, 2011. http://www.jma.go.jp/jma/press/1103/30a/110330_heinchi.html
 Laird, William E., 1982. *Soil Survey of Island of Ponape, Federated States of Micronesia*. Washington, D.C.: Department of Agriculture, Soil Conservation Service.
 Lambert, M., 1982. Federated States of Micronesia. *An Overview of Some Pacific Atolls*. Regional Technical Meeting on Atoll Cultivation, Papeete, Tahiti, French Polynesia, Technical Paper No. 180, pp. 6-9. South Pacific Commission, Noumea, New Caledonia.
 NOAA 1990. *Local Climatological Data: Annual Summary with Comparative Data, 1989, Pohnpei Island, Pacific*. National Oceanic and Atmospheric Administration, Environmental Data and Information Service. National Climatic Center, Asheville, North Carolina

今回は、研究成果に基づき、ナンマトル遺跡の特徴や重要性について詳しく紹介します。

歯が茶色や黒くなった人骨が見つかったりします。また、ビートルナッツ・チューインゲ用と思われるライムを納めるイモガイやタカラガイなどの貝製容器も見つかっています。

さて、もう一つの奇妙な習慣を紹介しましょう。それは、コショウ科の灌木であるカヴァの根を玄武岩の上で叩きつぶして、絞り出した液体を飲む習慣です(写真5)。

ただし、嗜好性の強いビートルナッツと違って、カヴァを飲む習慣は収穫祭や歓迎の宴や冠婚葬祭など伝統的な儀式や儀礼と切り離すことはできません。「カヴァなくして夜は明けない」とまで言われるほどです。現在は気楽な感じでも飲まれ、ところどころでシヤカオ(カヴァの現地名)のバーを見かけることがあります。

日本名では酒を付けて「カヴァ酒」と呼ぶことがありますが、アルコール分は含まれていません。それどころか、カヴァラクソンという成分は鎮静作用を起こすため、飲めば飲むほど体が動かなくなる不思議な飲み物です。戦時中には傷の痛み止めとして飲まれたそうです。見た目は土色をしたまさに下口、味はコショウ科の植物なのでややメンソール味、舌触りは納豆のようにヌルヌルしています。飲んでいるうちにお酒を飲んだような感覚に陥り、飲み続ける

と酩酊状態になります。

カヴァを飲む習慣は、ミクロネシアの南に広がるメラネシアのヴァヌアツ北部周辺

【役員】

理事長	佐藤 嘉恭	(最終官職：駐中華人民共和国特命全権大使)
常務理事	佐藤 昭治	(最終官職：駐ミクロネシア日本国特命全権大使 (兼パラオ・マーシャル諸島))
理事	荒木 恵	一般財団法人国際協力推進協会 事務局長 (最終官職：財務省 国際局局付派遣職員 (アジア開発銀行))
理事	坂本 吉弘	一般財団法人安全保障貿易情報センター 理事長 (最終官職：通商産業省 通商産業審議官)
理事	炭谷 茂	社会福祉法人恩賜財団済生会 理事長 (最終官職：環境省 事務次官)
理事	芳賀 達也	一般社団法人太平洋協会 事務局長
理事	舟木 いさ子	ヤクモ株式会社 代表取締役会長
理事	村上 洋	味の素株式会社 社外監査役
理事	山本 達也	エーオンジャパン株式会社 代表取締役社長
監事	金成 憲道	ドイツ証券株式会社 取締役会長
監事	兵藤 廣治	兵藤税理士事務所 税理士 (最終官職：衆議院 大蔵委員会調査室長)

【評議員】

評議員	石堂 一成	東京コンサルティング株式会社 代表取締役社長
評議員	渋澤 健	コモンズ投信株式会社 取締役会長
評議員	島内 憲	元駐ブラジル連邦共和国特命全権大使
評議員	廣野 良吉	成蹊大学 名誉教授
評議員	本多 義人	東神インターナショナル株式会社 名誉会長

毎月1回開催されるAPIC早朝国際情勢講演会では、外務省幹部、在外大使などを講師として、時局の外交課題や激動する国際情勢などについて講演が行われます。

現職の外務省局長、一時帰国中や退官直後の大使から、いま実際に進行中の国際情勢のテーマについて質の高い話を聞くことができる機会として、参加者からの評価は極めて高いものがあります。なお、APIC維持会員の皆様には自動的にご案内するほか、非会員で参加をご希望の方にもご案内を行っております。詳細については、裏表紙に記載しているAPIC事務局の連絡先にご照会ください。



【第341回早朝講演会にて】
外務省 欧州局長 正木靖氏

最近の講師とテーマ

第341回	2017年11月16日 外務省 欧州局長 正木靖氏	演題：「日露関係と欧州情勢」
第340回	2017年10月19日 外務省 アジア大洋州局審議官 石川浩司氏	演題：「最近の中東情勢について」
第339回	2017年9月21日 前駐インドネシア共和国特命全権大使 谷崎泰明氏	演題：「最近のインドネシア情勢と日・イ関係の課題と展望」
第338回	2017年7月20日 前外務審議官(経済) 片上慶一氏	演題：「G7/G20 サミット」
第337回	2017年6月15日 外務省 アジア大洋州局南部アジア部長 梨田和也氏	演題：「最近の東南・南アジア情勢と日本外交」
第336回	2017年5月18日 外務省 国際協力局長 山田滝雄氏	演題：「最近の日本外交における国際協力について」
第335回	2017年4月20日 前駐ベトナム社会主義共和国特命全権大使 深田博史氏	演題：「発展するベトナムと日・ベトナム関係」

※講演時の役職を記載しています。

ザビエル
留学生
奨学金

◆ ご寄附のお願い ◆

対象 ザビエル高校卒業生 毎年1~2名
留学先 上智大学国際教養学部、理工学部など
奨学金 卒業までの4年間の奨学金を授与

留学生を中・長期的に受け入れるためには、それにかかわる渡航費、入学金、授業料、生活費等とかなりの額にのぼることが見込まれます。皆さまからのご協力をお願い申し上げます。

銀行振込先

三菱東京UFJ銀行 本店(店番001) 普通口座1660339
口座名 一般財団法人 国際協力推進協会 奨学金募金口
カナ名 ザイ) コクサイ キョウリヨク スイシン キョウウカイ
※振込手数料はご負担をお願いしております。

皆様のご支援 ありがとうございます。

ザビエル留学プログラムは、上智大学の留学生基金の他、皆様のAPICへのご寄附により、2018年1月現在、総額約8,364万円お預かりいたしました。

皆様のおかげで、留学生は上智大学で充実した生活を送っています。誠に、ありがとうございます。

御礼申し上げますとともに、本留学生制度に更なるご支援をお願いいたします。



APIC では維持会員（法人会員・個人会員）を募集しております。

APIC 維持会員の皆様には毎月開催される外務省高官、大使による **APIC 早朝国際情勢講演会** を自動的にご案内するほか、非会員で参加をご希望の方にもご案内を行っています。詳細につきましては、APIC 事務局にご照会ください。

場所 ホテルオークラ東京 会議場

時間 午前 8:30 ~ 10:00（朝食付き）

APIC 事務局 (TEL) 03-5577-2900 (FAX) 03-5577-2901
(E-mail) apicinfo@apic.or.jp

■発行人
佐藤 嘉恭

■発行日
平成 30 年 1 月 1 日

■発行所
一般財団法人 国際協力推進協会
〒101-0054
東京都千代田区神田錦町 3-15-6
名鉄不動産竹橋ビル 7 階
TEL : 03-5577-2900 / FAX : 03-5577-2901
MAIL : apicinfo@apic.or.jp

■編集長
芳賀 達也（理事）

■副編集長
加藤 奈美 / 松尾 彩花

■編集：APIC インターン生
大野 敦子（上智大学） 中村 誓人（上智大学）
太田あおば（上智大学） 永沼 弥生（上智大学）
大高 彩果（津田塾大学）
川上 琳（津田塾大学）
島田 紗弥（上智大学）
太刀川ゆりあ（津田塾大学）